

平成 25 年 7 月 3 日

平成 25、26 年度 水工学委員会構成

【顧問】

池田 駿介 (建設技術研究所)
小松 利光 (九大)
砂田 憲吾 (山梨大学)
辻本 哲郎 (名大) : 水理公式集編集小委員会委員長、河川懇談会座長
山田 正 (中央大) : タイ洪水対応小委員会委員長、CommonMP コンソーシアム幹事長
中川一 (京大防災研) [新規] IAHR 日本支部

【専門委員】 17 名 (定員 17 名) ◎ : 執行部、○ : 幹事、△ : オブザーバー

朝位 孝二 (山口大) : ホームページ担当
天野 光歩 (建設技術研究所)
泉 典洋 (北大)
大石 哲 (神戸大)
沖 大幹 (東大)
河原 能久 (広島大)
萱場 裕一 (土木研究所)
○篠田 成郎 (岐阜大)
清水 康行 (北大)
◎○立川 康人 (京大) : 幹事長、流域管理と地域計画幹事長、CommonMP コンソーシアム委員
田中 仁 (東北大) : IAHR-APD 会長, IAHR 理事
田中 昌宏 (鹿島建設)
富永 晃宏 (名工大)
中北 英一 (京大防災研) : 地球環境水理小委員会委員長
堀智晴 (京大防災研) : 水害対策小委員会委員長 [新任]
◎○道奥 康治 (神戸大) : 委員長
渡邊 康玄 (北見工大)

【海岸工学委員会との交換委員】 1 名 (定員外)

△八木 宏 ((独)水産総合研究センター)

【地区委員】 33 名 (定員 33 名) (○印 : 水工学委員会幹事で 20 名以内)

<北海道 2 名>

○中津川 誠 (室蘭工大)
八田 茂美 (苫小牧工専)

<東北 2名>

- 風間 聡 (東北大)
- 川越 清樹 (福島大)

<関東 15名>

- 浅沼 順 (筑波大) : 水文部会長、土木学会論文集 B 部門編集小委員会 (英文担当)
- 福濱 方哉 (国土交通省国土技術政策総合研究所)
- 今村 正裕 (電中研主任研究員)
- 石平 博 (山梨大) : 土木学会論文集 B 部門編集小委員会 (英文兼任)
- 神田 学 (東京工大)
- 清水 義彦 (群馬大)
- 関根 正人 (早稲田大) : 土木学会論文集編集委員会 (編集調整会議) 委員、B 部門編集小委員会副委員長 (英文担当)
- 田中 規夫 (埼玉大)
- ◎○知花 武佳 (東大) : 水工学論文集編集委員長
- 渡邊 泰也 (国交省河川局)
- 藤堂 正樹 (パシフィックコンサルタンツ)
- 中嶋 規行 (日本工営) : 出版委員会委員
- 二瓶 泰雄 (東京理科大) : 沿岸環境関連学会連絡協議会委員
- 安田 陽一 (日本大学) [新任]
- 横山 勝英 (首都大学東京) : 土木学会論文集編集委員会 B 部門合同編集委員会幹事長、沿岸環境関連学会連絡協議会委員

<中部 3名>

- 原田 守博 (名城大)
- 鈴木 正人 (岐阜工専)
- 戸田 祐嗣 (名古屋大)

<関西 6名>

- 大槻 英樹 (ニュージェック)
- 西田 修三 (大阪大) : 海岸工学委員会対応委員
- 神田 佳一 (明石工専) : 土木学会論文集 B 部門編集小委員会
- 里深 好文 (立命館大)
- 角 哲也 (京大防災研) : 環境水理部会長
- 藤田 一郎 (神戸大) : 水理実験指導書編集小委員会委員長、流量観測技術高度化小委員会委員長

<中国 2名>

- 近森秀高 (岡山大) : 土木学会論文集 B 部門編集小委員会

渡辺勝利（徳山高専）[新任]

<四国 1名>

○武藤裕則（徳島大）[新任]：平成25年度 水シンポジウム担当

<西部 2名>

鬼束幸樹（九州工大）：平成26年度夏季研修会担当

○杉原裕司（九州大）[新任]

<オブザーバー 5名>

△大本照憲（熊本大）：基礎水理部会長 [新任]

△河村 明（首都大学東京）：東南アジア河川流域研究小委員会委員長

△堀田哲夫（建設技研）：ISOTC113 小委員会委員長

△松田寛志（日本工営）：河川部会長 [新任]

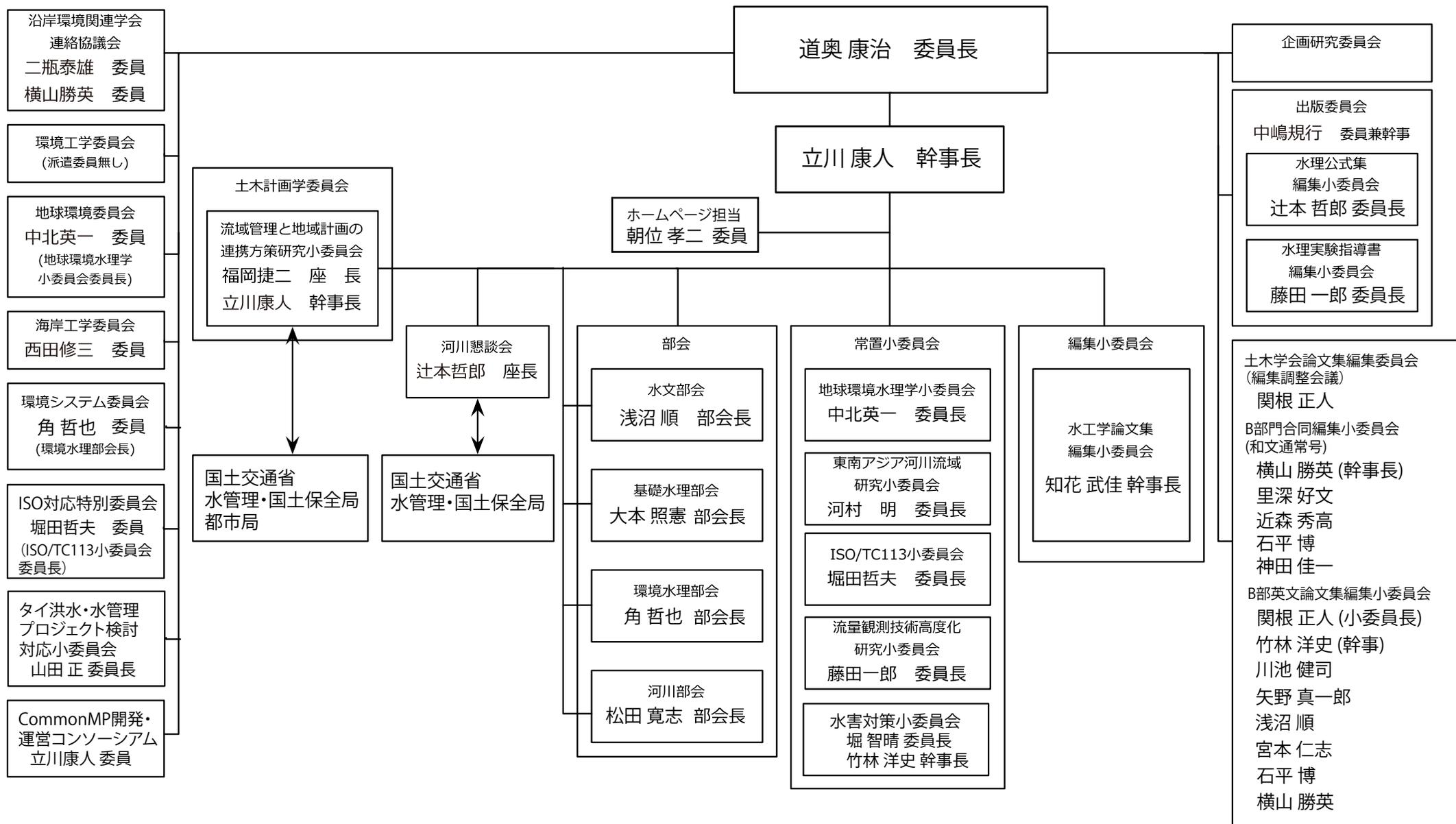
△竹林洋史（京大防災研）：水害対策小委員会幹事長 [新任]

[メモ]

- (1) 2014年の水シンポ：対応者を決定する必要あり。
- (2) 58回水工学講演会（2014年3月神戸大学で開催）：小林健一郎先生（神戸大）が対応される。
- (3) 59回水工学講演会（2015年3月早稲田大学？）：関根先生に検討をお願いしている。
- (4) 60回水工学講演会（2016年3月）：開催地区を決定する必要あり。

水工学論文集編集委員会幹事 は知花幹事長と相談。

2013-2014 水工学委員会



第49回

水工学に関する夏期研修会

主催：公益社団法人 土木学会（担当：水工学委員会，海岸工学委員会）

共催：公益社団法人 土木学会 中部支部

期日：2013年8月26日(月)～27日(火)の2日間

(A・Bコース並行開催)

場所：名古屋工業大学 52号館1階 5211教室，5212教室

(名古屋市昭和区御器所町)

アクセスマップURL

<http://www.nitech.ac.jp/access/index.html>

本研修会は土木学会のCPD
(継続教育)プログラムと
して認定されています。

日程および講義題目・講師 (注) 講義題目には若干の変更がある場合があります

Aコース(河川・水文) [行事コードNo.233021]

《総合テーマ》：「都市の水防災と河道の維持管理」

Bコース(海岸・港湾) [行事コードNo.233022]

《総合テーマ》：「伊勢湾台風級高潮と巨大地震津波を考える」

■ 8月26日(月)

■ 8月26日(月)

9:05～	開会挨拶 名古屋工業大学・教授 富永晃宏	9:05～	開会挨拶 名古屋工業大学・教授 喜岡 渉
9:15～ 10:45	東海ネーデルランド高潮洪水防災について 小林克治 (中部地方整備局河川部・水災害予報センター長)	9:15～ 10:45	愛知県の海岸防災対策について 沼野秀樹 (愛知県建設部・技監)
11:00～ 12:30	都市域における浸水解析 武田 誠 (中部大学・教授)	11:00～ 12:30	地球温暖化による海象・気象への影響と 可能最大級高潮 吉野 純 (岐阜大学・准教授)
13:30～ 15:00	地下浸水とその備え 戸田圭一 (京都大学・教授)	13:30～ 15:00	伊勢湾台風級の高潮と確率潮位 北野利一 (名古屋工業大学・准教授)
15:15～ 16:45	豪雨災害による人的被害 牛山素行 (静岡大学・准教授)	15:15～ 16:45	防波堤の信頼性設計 長尾 毅 (神戸大学・教授) (元 国土交通省 国土技術政策総合研究所・港湾研究部長)

■ 8月27日(火)

■ 8月27日(火)

9:15～ 10:45	水系一貫の土砂管理について 角 哲也 (京都大学防災研究所・教授)	9:15～ 10:45	沿岸域における防災・減災対策について 青木伸一 (大阪大学・教授)
11:00～ 12:30	河川堤防の浸透破壊と液状化 杉井俊夫 (中部大学・教授)	11:00～ 12:30	南海トラフ巨大地震津波について 水谷法美 (名古屋大学・教授)
13:30～ 15:00	河道内樹林化機構とその制御 前野詩朗 (岡山大学・教授)	13:30～ 15:00	津波防災の歴史と今後の課題 首藤伸夫 (東北大学・名誉教授)
15:15～ 16:45	中小河川における多自然川づくりの 考え方と課題 萱場祐一 (土木研究所・自然共生センター・センター長)	15:15～ 16:45	地域防災力の向上を目指して 松田曜子 (関西学院大学・准教授)

定員：Aコース150名，Bコース150名

受講料：1コースにつき，一般16,000円，学生・院生13,000円(いずれも講義集代を含む)

申込方法：土木学会ホームページ：<http://www.jsce.or.jp/event/active/information.asp>

もしくは、FAX(学会誌巻末に掲載されている「本部行事参加申込用紙」)をご利用下さい

申込締切日：2013年8月16日(金)【必着】

締め切り日以降は，原則として行事当日会場にて受付致しますが，定員に達している
場合がありますので，事前に下記へお問い合わせ下さい

問合先：土木学会 研究事業課 TEL:03-3355-3559(担当:岩西)

備考：会場の詳細，講義の変更等の最新情報に関しては，下記ホームページでご確認ください

水工学委員会ホームページ <http://committees.jsce.or.jp/hydraulic/>海岸工学委員会ホームページ <http://www.coastal.jp/ja/>



高知家

水

2013

in

こうち

入場
無料

シンポジウム

「志国高知で水と向き合う」清流は、土佐の山間より

仁淀川 鎌井田



8月22日 木 シンポジウム

9:30~17:10 [9:00開場]
高知市文化プラザかるぽーと

- 日本水フォーラム報告
- 基調講演
- 分科会
- パネル展示

8月23日 金 現地見学会

9:00~16:00
清流仁淀川にふれあう&
地震・津波への備えを見る

参加費:2,000円(昼食込、小学生以下半額)
定員:40名
※先着順となりますのでご希望に添えない場合もございます。

主催：第18回水シンポジウム2013 in こうち実行委員会

(公益社団法人 土木学会水工学委員会・国土交通省四国地方整備局・高知県・高知市)



共催：公益社団法人高知県建設技術公社・一般財団法人防災研究協会・一般財団法人日本建設情報総合センター四国地方センター
一般社団法人日本建設業連合会四国支部・一般社団法人建設コンサルタンツ協会四国支部・一般社団法人高知県測量設計業協会
四国地質調査業協会高知支部

このシンポジウムは、公益財団法人 河川財団の河川整備基金の助成を受けています。
このシンポジウムは、一般社団法人 四国クリエイト協会の助成を受けています。



この印刷物は、EPAのゴールドプラス基準に適合した地球環境にやさしい印刷方法で作成されています
E3PA：環境保護印刷推進協議会
<http://www.e3pa.com>
このチラシは再生紙を使用しています

水 シンポジウム 2013 in こうち

第18回

「志国高知で水と向き合う」～清流は、土佐の山間より～

高知県は、黒潮打ち寄せる変化に富んだ海岸線をはじめ、四万十川・仁淀川に代表される「清流」や、県土の84%を占める森林など、豊かな自然に恵まれています。一方、本県は全国でも有数の豪雨地帯であり、過去幾多の洪水、さらには南海地震等による津波により甚大な被害を受けてきました。こうした水が自然や人に与えるさまざまな恩恵と諸問題について、市民・事業者・研究機関・行政が幅広く議論や意見交換を行い、それぞれの役割を明確にしつつ連携を深めることにより、「水と人との好ましい関係」を全国に発信するためにシンポジウムを開催いたします。

午前の部

- 9:00 開 場
- 9:30 開 会 (オープニングセレモニー)
- 10:00 **日本水フォーラム報告**
「21世紀は水の世紀 -災害と水資源-」
日本水フォーラム代表理事・事務局長 竹村 公太郎
- 10:50 **基調講演**
「南海トラフ巨大地震に備える」
高知大学総合研究センター特任教授 防災部門長 岡村 眞
- 11:50 昼休憩

午後の部【分科会等】

- 12:50 **テーマ別分科会** (パネルディスカッション形式)
- 15:10 休憩／パネル展示
- 15:30 **四国水問題研究会報告**
「水でつながる ～四国はひとつ～」
四国水問題研究会 会長 井原 健雄
- 16:00 **全体会議**
各分科会まとめとメッセージ発信
- 17:00 次回開催県挨拶
- 17:10 閉 会

8月22日(木) シンポジウム

高知市文化プラザ かるぽーと大ホール

入場無料

テーマ別分科会 ● 第1分科会 会場：大ホール ● 第2分科会 会場：小ホール

第1分科会 会場：かるぽーと大ホール

巨大水災害への備え ～今できること、これからすべきこと～

● コーディネーター

日本工営(株)
流域・防災事業部長
松田 寛志

● パネリスト

高知工業高等専門学校 准教授	高知工科大学 システム工学群 教授	内閣府政策統括官 (防災担当) 付参事官
岡田 将治	甲斐 芳郎	藤山 秀章
静岡大学防災総合センター 准教授	高知市立瀨江中学校 校長	
牛山 素行	宮田 龍	

第2分科会 会場：かるぽーと小ホール

清流の志国高知 ～豊かな水環境を活かした持続可能な地域づくり～

● コーディネーター

高知大学
自然科学系農学部門 教授
藤原 拓

● パネリスト

NPO法人環境の社こうち 副理事長	たかはし河川生物調査 事務所 代表	かわらびの 代表取締役 ・高知のまちづくりを考える会代表
石川 妙子	高橋 勇夫	畠中 智子
梶原町環境整備課長	魚と山の空間生態 研究所 代表	
矢野 準也	山下 慎吾	

8月23日(金) 現地見学会

【清流仁淀川にふれあう&地震・津波への備えを見る】

参加希望者のみ 参加費:2,000円(昼食込、小学生以下半額)
定員:40名 ※先着順となりますので希望に添えない場合もございます。
集合・解散:高知駅南口

9:00 集合・出発:高知駅南口(はりまや橋観光バスターミナル経由)
「仁淀川(遊覧(屋形船) + 紙すき体験) 又は「カヌー体験」高知海岸(新居～仁ノ)、
高知海岸(桂浜)、五台山展望台(河川堤防耐震対策)、高知県立牧野植物園
16:00 高知駅解散(はりまや橋観光バスターミナル経由)



かるぽーとまでの所要時間

- 高知空港から空港連絡バスで約30分
- 高知駅からタクシーで約10分
- 高知自動車道 高知ICから車で約20分

駐車場のご案内

- 通常料金(8:30～22:00) / 30分ごと150円
- 深夜料金(21:30～翌日9:00) / 1,000円
- 収容台数 / 200台
- 営業時間 / 8:30～22:00

参加申し込み方法

※シンポジウム及び現地見学会ともに、事前にお申し込みください。
※ご記入いただいた個人情報は申し込みのイベントに関連した連絡のみに使用します。

ホームページの入力フォーム、もしくは申込書をダウンロードしてFAXでお申し込みください。はがき、またはEメールでお申し込みの際には、下記項目をご記入ください。

① 所属、住所、氏名(フリガナ) ※複数名記入可

※現地見学会参加希望者は必須

② 電話番号

③ 参加を希望される企画

A: シンポジウム 8月22日(木)
B: 現地見学会 8月23日(金)

見学会参加希望の方は以下の項目を明記ください
バスの乗車希望 高知駅南口 はりまや橋観光バスターミナル
体験希望コース 仁淀川遊覧+紙すき体験 カヌー体験

水シンポ 2013 検索 <http://www.jp/mizusinpo2013>

参加申し込み先 参加申し込み方法などについては

「第18回 水シンポジウム 2013 in こうち」申込係

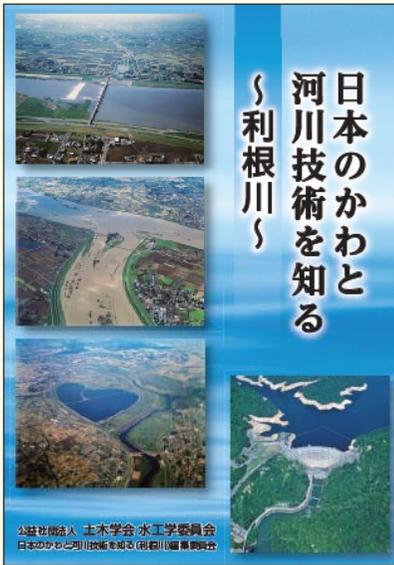
〒780-0985 高知市南久万84-9 めぞん太陽1201 (株)ひととコーポレーション内
TEL:088-892-5092 FAX:088-879-5093

E-mail: mizusinpo2013@wwb.jp

開催内容に関するお問い合わせ 高知県土木部河川課

〒780-8570 高知県高知市丸ノ内1-2-20

TEL:088-823-9836 FAX:088-823-9129 E-mail: 170901@ken.pref.kochi.lg.jp



日本のかわと河川技術を知る ～利根川～

■編集：水工学委員会
日本のかわと河川技術を知る(利根川)
編集委員会
(委員長：中央大学・山田 正)

■2012年12月発行、B5判、356ページ、並製本
+付録CD-ROM

■定価：2,940円（本体2,800円+税）
■会員特価：2,650円（税込） ■送料：470円
ISBN 978-4-8106-0744-4

待望の利根川本！利根川の総合解説本、河川技術の副読本

河川の自然特性や治水・水資源開発の歴史、人の営みの中における河川の役割についての正しい認識が必ずしも十分に理解されていません。そこで、我が国大河川の代表である利根川を対象とし、幅広い研究者や水工学に造形の深い研究者、行政関係者、コンサルタント研究者等を一同に集め、これまでの膨大な調査研究資料の集約と課題の整理を行い、本書を取りまとめました。

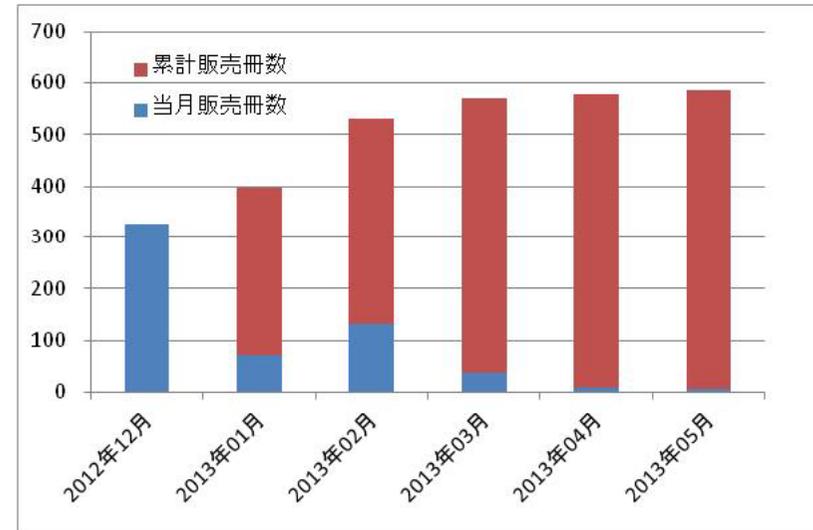
本書は土木系学生や若い土木技術者に向けた河川工学や水文学の教科書の副読本として利用してもらう他に、日ごろの研究活動や河川に関する仕事を通じて得た読者それぞれが重要とする情報を本書のページの合間や付録のCDに追加することによって、読者個々の利根川本となることを期待しています。

本書の構成

- | | |
|-------------|---------------|
| 1章 利根川流域の概要 | 5章 利根川の河川管理施設 |
| 2章 利根川の治水 | 6章 利根川の河川情報 |
| 3章 利根川の利水 | 付録 CD-ROM |
| 4章 利根川の環境 | |

発行部数 1,000部
販売部数 586部
採算ライン 700部

資料5



- 土木学会出版委員会で販売状況を毎月モニタリングし、採算ラインをクリアしていない書籍は発行委員会へ販促活動を要請している。
- あと約120部で採算ラインをクリアするが最近、販売部数が伸び悩んでいるため学生等への販促活動をお願いしたい。

水理公式集に関する方針メモ

(6月25日, 辻本研究室)

・9,10月頃に出版企画を提出して編集作業を開始できるように, 編集幹事長(複数可)を含む各編主査ならびに, 目次概要の編成をお願いしたい。出版企画の **take off** 後は, 2年を期限として刊行することが条件。

・電子出版ではない印刷媒体を考える。したがって, 価格設定を勘案してページに上限がかかる(現行の公式集のページ数程度)。

・出版委員会の予算措置以外には財源を期待できないため, 会議が必要な場合には, 河川技術シンポ, 全国大会, 水工学講演会などの学会に合わせて開催頂きたい。

・海岸・港湾編については, 海岸施設設計便覧や **Coastal Engineering Manual** があるため, 過年度の海岸・港湾編をベースにしたマイナーチェンジが現実的な構成のようである(後藤前幹事長より目次・執筆候補者案がすでに送付されており, 直ちにスタートできる状態)。

・河川砂防技術基準や各種の便覧・マニュアル類との機能分担や水理公式集の **Philosophy** がポイント。河川砂防技術基準の **Follow up** 体制も視野に入れる。

・実務での水理公式集の使用頻度は少なく, 便覧・マニュアル類を業務に使うことがほとんどである。一方で, マニュアル類の学術根拠として学会が発信する公式集の位置づけが求められており, 必要であることは間違いない。

・ある程度の部数は売れるので出版企画は成立する見込み。

・水環境編が不評である。水処理関係は上下水道ハンドブックが十分に機能しており, 水理公式集にそれらの内容を含めることは不可能。水環境編を含めるとすれば, 水工学各分野に関連する水質基礎が中心になる見込み。水環境編を加える場合には, 環境工学委員会へ水工学委員長から協力を要請する。

・汎用プログラムが普及しているので, 数値解析手法を水理公式集に含めることはなじまない(S60年版の例題公式プログラムは数値解析を補うために, 刊行されたが, 現在の状況では需要はない)。

・基礎水理編を復活頂きたい。

・執筆者の個性・嗜好が反映されないような文章表現・内容にして頂きたい。

《道奥私見》

・地球環境編。

・序文構成: 河川流域の総括的視点から見た水理公式集の目次構成の考え方を示す

・名前は「水理公式集」。

水文部会活動報告

A. 活動報告

平成24年度第1回水文部会

日時：平成25年3月5日13:00

場所：名城大学共通棟403号室

- (1) 第13回地下環境水文学研究集会報告（中川）
- (2) 水理公式集改訂作業の報告（中津川）
- (3) 河川部会員への水文部会員の派遣（小林）
- (4) 年次講演会における共通セッション（立川）
- (5) IHPへの協力要請（立川）
- (6) 部会長の交代（新水文部会長、浅沼）
- (7) その他

4月 UNESCO-IHP (Regional Steering Committee (RSC) for Southeast Asia and the Pacific (国際水文学計画東南アジア・太平洋作業部会) のSecretaryの京大立川先生中心として、部会内にIHP-RSC作業グループを設立することとなった。

B. 水文部会の体制

部会長： 浅沼 (筑波大)

副部会長： 風間 (東北大)

部会員構成を部会メンバーリストにて議論中

C. 予定

9月 学会期間中に部会、セミナー、開催予定 (9月4日夜セミナー,5日部会)

10月 水文集会：福島にて開催予定 (2泊3日)

平成 25 年度基礎水理部会の活動内容

基礎水理部会長 熊本大学・大本照憲

(1) 河川流・河床変動解析ソフト:iRIC version2.0 講習会 in 東京 (開催済み)

日時 :2013年4月17日(水)9:00~4月19日(金)17:30

場所 :土木学会講堂(東京都新宿区四谷一丁目外濠公園内)

主催 :(公社)土木学会水工学委員会 基礎水理部会

後援 :iRIC研究会、USGS(U.S. Geological Survey)、一般財団法人 北海道河川財団

内容:チュートリアルに従って、iRICをパソコン上で操作し、実際に解析を行いながらiRICの各ソルバーの仕様方法を習得する3日間の集中講習会です。講習対象ソルバー:Nays2D, Nays2D Flood, Nays CUBE, Morpho2D, FaSTMECH2d model, FaSTMECH Quasi-3d Model, River2D

趣旨:研究及び業務で河川の解析をよりスムーズに実施頂けるようになることを目的として、講師の説明に従ってiRIC version2.0 を実際に使い、3日間でiRICの仕様方法をマスターして頂くための集中講習会です。

定員 :60名

参加費 :18000円(本講習は、アメリカからの2名の講師の招聘費、土木学会への納付金等のため)

(2) 平成25年度 基礎水理シンポジウムプログラム(案)

題目:移動床水理学が生態系保全に果たす役割

日時:2013年12月2日(月) 9:20-16:30

場所:土木学会講堂(東京都新宿区四谷一丁目無番地)

特別講演 2件

京都大学防災研究所・竹門康弘先生

土木研究所自然共生研究センター長・萱場祐一氏

一般講演 4件

埼玉大・田中規夫先生,名工大・富永先生, 自然共生研究センター・原田氏,熊大・大本

1. 河床変動と樹林化(植生水理), 2. 粗度境界層と生態系(付着藻類、水生昆虫、魚類他)

3. 洪水制御と生物環境(水制、ワンド), 4. 河川感潮域の土砂動態と生物相

5. その他

(3) 平成25年度基礎水理部会現地見学会(愛媛県,肱川)

日時:2013年10月20日(土)~22日(火)(案)

場所:愛媛県・肱川等の見学

詳細な日程は、現在調整中

環境水理部会報告

部会長 角(京大防災研)

部会の体制

部会長:角 哲也(京都大学)

副部会長:宮本 仁志(神戸大学)

幹事:赤松 良久(山口大学)

大石 哲也((独)土木研究所)

WG:震災対応WG(横山(首都大学東京))

土木学会重点研究課題、H25研究集会

教科書作成WG(二瓶(東京理科大)) 出版準備

流域圏WG(赤松) 今年度は「ゴミ」関係

樹林化WG(宮本) (新設)

環境水理部会研究集会(一ノ関, 気仙沼)実施報告

H25研究集会

1. 日時 平成25年5月31日(金), 6月1日(土)

2. 開催地 岩手県一関市文化センター

3. スケジュール

5月31日(金)研究発表会, 懇親会

10:00 会場・受付

10:40 開会挨拶(環境水理部会長・二瓶泰雄)

10:50 第一セッション(4題)～モデリング・工法～

13:20 第二セッション(5題)～震災関連～

15:50 特別講演(2題)～一ノ関市・宮城県の復興～

16:50 第三セッション(4題)～生態系～

17:50 閉会挨拶(次期部会長・角 哲也)

参加者数

①研究集会 42名(うち2名招待講演)

②見学会 36名

座長: 二瓶泰雄

座長: 角 哲也

座長: 横山勝英

座長: 竹林洋史

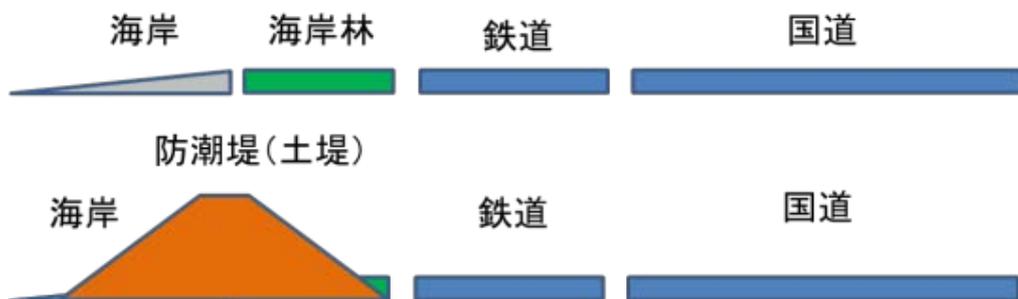


6月1日(土)三陸被災地の見学会

気仙沼市・南三陸町における津波被害と海岸・河口の環境変化，復興の見通し，海岸堤防の建設などについて，被災者からお話を伺った。

現地見学会

防潮堤計画と環境(景観)保全の両立に課題



土木学会重点研究課題(H24採択)

研究課題： 流域圏における放射性物質・化学物質の動態が
生物環境に及ぼす影響

研究体制： 代表研究者：横山勝英（首都大学東京）

研究メンバー：

赤松良久（山口大学），井芹 寧（西日本技術開発），今村正裕（電力中央研究所），工藤健太郎（いであ），田代 喬（名古屋大学），鶴田 舞（国土交通省国土技術政策総合研究所），長尾正之（産業技術総合研究所），二瓶泰雄（東京理科大学），藤野 毅（埼玉大学），湯浅岳史（パシフィックコンサルタンツ）

協力者：

田中 克（国際高等研究所），鯉淵幸生（東京大学）

報告書提出済（学会
HP掲載予定）

第三回流域圏シンポ： がれき・放射性物質の移動実態と生態系への影響（平成24年12月14日（金））

(1) がれき問題

海底がれきの発生量や分布状況，がれきからの重金属・化学物質の漏出など

(2) 放射性物質の問題

森林・都市表土に蓄積した放射性物質の雨天時流出，除染効果の評価，河川経由の放射性物質の沿岸域・湖沼への堆積

(3) 生態系への影響

各種物質のベントス，魚類などへの影響

「環境水理学」の目次

1. 環境水理学とは
2. 水の動態
3. 熱・塩分の動態
4. 土砂・懸濁物質の動態
5. 水質の動態と生態系
6. 流域圏における環境水理的課題の現状と対策

執筆状況

H25年5月末: 第一稿を作成.

現在: 修正作業中.

→ H25年度内に学会へ提出予定

樹林化WG(新規)

「樹林化現象の類型化」に関する 新規ワーキンググループ(樹林化WG)

WG主査 宮本仁志(神戸大学)

1. これまでの経緯

1) 環境水理部会・河川部会共催ジョイントワークショップ開催(2012年11月@神戸)

「河川の樹林化とは何か: 樹林化現象の統合理解と今後の河川流域管理にむけて」

2) 2013年度河川技術に関するシンポジウム(2013年6月@東京)

JWS報告・総説論文・ポスター発表・樹林化アンケート(実施中)@河川部会HP

論文データベース近日公開予定@環境水理部会HP

2. 目的: 樹林化現象のデータベースと類型化

「河川の樹林化とは何か?」の問いに一定の回答

3. 活動期間(予定): 2013.06 ~ 2015.05 (2カ年)

4. 今年度の活動計画

- 河川部会との共同: ワーキングメンバーの確定
- Kickoff Meeting (秋期)
- 樹林化事例収集, DB作成へむけてフォーマットづくり



河川部会の活動報告

部会長 松田寛志（日本工営）

1. 2013年度・河川技術に関するシンポジウム

開催日程 2013年6月6～7日

① 投稿数

回数	年度	アブストラクト		本論文	
		投稿数	通過数	投稿数	通過数
14	2008	173	102	97	86
15	2009	158	107	99	89
16	2010	178	130	115	93
17	2011	172	132	120	92
18	2012	188	129	113	97
19	2013	200	129	118	97

② プログラム（別紙ー1）

③ OS

1) 危機管理の実務に供する洪水予測技術

洪水予測の技術研究開発の動向の整理、実務で運用するに当たっての課題を共有し、危機管理の実務に資する予測技術の研究開発、現場適用に向けた方策を議論した。

【話題提供】

- ・ 粒子フィルタを用いた水位・流量予測について 京都大学 立川康人
- ・ 直轄河川での洪水予測の現状 京都大学防災研究所 吉谷純一
- ・ 分布型洪水予測システムの点検（実情の紹介を交えて）
三井共同建設コンサルタント株式会社 四位和彦
- ・ ニューラルネットワークモデルによる洪水予測
八千代エンジニアリング株式会社 竹村仁志
- ・ 地方自治体から見た洪水予測 横浜市 谷口丞

2) 国境を越える河川技術－世界に通用する河川技術を目指して

日本の河川技術の国際化に向け、日本の河川技術者が目指すべき方向性や日本の河川技術の将来像に関して示唆を与えることを目的とした。

【基調講演】

- ・ 国際化に向けた研究・技術開発の動向 : 東京大学 小池 俊雄

【話題提供】

- ・ 国際協力に関する歴史的変遷・課題・今後の方向性に関する話題提供
国際協力機構 石渡 幹夫
- ・ ICHARM の取り組みに関する話題提供
水災害・リスクマネジメント国際センター (ICARM) 岡積 敏雄
- ・ 海外での施工計画上の課題に関する話題提供（メコン川での水制設置事例）
国土交通省近畿地方整備局姫路河川国道事務所 松木 洋忠
- ・ タイ治水計画コンペ参加から見てきた課題・教訓に関する話題提供
建設技術研究所 天野 光

2. 地盤工学委員会堤防小委員会「浸食・浸透破壊・洗掘 WG」＋水工学委員会河川部会「堤防 WG」の活動報告

浸透及び浸透破壊に係る課題に関する意見交換

第2回 合同会議 2013年5月9日 15:00-19:00

第3回 合同会議 2013年7月30日 15:00-19:00

(議題内容)

1. 「実事例，実物大実験，模型実験」の事例かわかること
2. 想定されるメカニズム（粒子，間隙，土塊，堤防鉛直断面，河川横断断面，河川縦断・横断断面）
3. それらを予測，評価することは可能か，どんな方法があるのか，それらの問題点，課題について

**2013年度 河川技術に関するシンポジウム—新しい河川整備・管理の理念と
それを支援する河川技術に関するシンポジウム— プログラム**

(6月6日~7日、東京大学農学部弥生講堂)

<u>6月6日(木)</u>	第1日目	開催場所：
08:30-	受付 (ポスターセッション1 設営準備)	
09:30-09:40	開会の挨拶 (河川部会部会長 泉 典洋)	一条ホール
09:40-11:10	<u>ポスターセッション1 (PS1)</u> ※	エントランスホール
11:20-12:30	<u>オーガナイズドポスターセッション1 (OPS1)</u> 「超過洪水と堤防の危機管理 (仮題)」 企画・進行：堤防 WG	一条ホール
12:30-12:45	樹林化 WS の報告	一条ホール
12:45-13:30	昼食 (ポスターセッション2 設営準備)	エントランスホール
13:30-15:00	<u>ポスターセッション2 (PS2)</u>	一条ホール
15:00-16:00	<u>オーガナイズドポスターセッション2 (OPS2)</u> 「水害の予測と評価—モデルの現状と課題— (仮題)」 企画・進行：流域減災・アダプテーション WG	一条ホール
16:00-18:10	<u>特定課題オーガナイズドセッション (OS)</u> 「危機管理の実務に供する洪水予測技術」 オーガナイザー：椿 涼太, 内藤 正彦 未定	
18:20-	交流会	交流会会場
<u>6月7日(金)</u>	第2日目	
08:30-	受付 (ポスターセッション3 設営準備)	
09:30-11:00	<u>ポスターセッション3 (PS3)</u>	エントランスホール
11:10-12:20	<u>オーガナイズドポスターセッション3 (OPS3)</u> 「河床・河道変動とその制御技術 (仮題)」 または「水生生物の生息場と河川の自然再生 (仮題)」 企画・進行：河道 WG	一条ホール
12:20-13:40	昼食	
13:40-16:40	<u>特定課題オーガナイズドセッション (OS)</u> 「国境を越える河川技術」 オーガナイザー：泉 典洋, 松田 寛志, 戸田 祐嗣 ・趣旨説明 ・国際化に向けた研究・技術開発に関する基調講演 ・国際協力に関する歴史的変遷と今後の方向性に関する話題提供 ・河川・防災技術の現状と今後の方向性に関する話題提供 ・パネルディスカッション ・総括	一条ホール
16:40-17:00	閉会式 (河川部会副部会長 松田寛志) ・優秀発表者賞の発表 ・閉会の挨拶	一条ホール

平成 25 年度 第 1 回海岸工学委員会 報告 (阪大 西田)

開催日時：平成 25 年 6 月 19 日 (水) 14:00～16:30

開催場所：土木学会 2F 講堂

1. 平成 25, 26 年度海岸工学委員会委員長選挙結果
委員長；佐藤慎司委員
(副委員長：青木伸一委員、幹事長：佐々木淳委員兼幹事)
 2. 土木学会論文集(B 部門)合同編集小委員会
委員長：水谷法美委員
 3. 水理公式集改訂
主査：間瀬前委員長，統括補佐：後藤前幹事長
執筆者およびスケジュール案提示
 4. 海岸工学講演会開催予定
第 60 回海岸工学講演会 (福岡)：平成 25 年 11 月 13 (水) ～ 15 日(金)
第 61 回海岸工学講演会 (名古屋)：平成 26 年 11 月 12 日(水) ～ 14 日(金)
 5. 水工学に関する夏期研修会開催予定
2013 年 8 月 26 日(月)，27 日(火)：名古屋工業大学.
2014 年度に関しては，水理委員会からの連絡待ち.
- 次回の海岸工学委員会は，海講開催中の 11 月 13 日 (水) 18 時より

地球環境水理学小委員会

資料7 - 5

中北英一(京都大学防災研究所)

活動内容: 水工学分野での、気候変動影響評価や適応策に関する研究に携わる実務者・研究者の増加やそれらに貢献する活動

メンバー: 文科省の創生プログラム、RECCAや、環境省のS-8プログラムに参加している主なメンバーを土台に、前委員会でのメンバーとする。

沖、鼎、立川、風間、田中(賢)、大楽、キム・スンミン、矢島、山田(朋)、吉村、中北(順不同)にて開始。新たなご参加も歓迎する。

アゲールに関しましては、これまで2年間、上記趣旨で開催してきたが、今後2年間もそれを土台として進めて参りたい。

本年9月3日に東京で、文科省の創生プログラム、RECCA、環境省のS-8合同の研究交流会を開催し、共通の問題点について発表・議論する。この会合を、本委員会の活動の一つとしてもらいたい。参加希望の人は、中北までご一報いただきたい。

ISO0に関する状況は、次の通り。

- ・ 現在「水文データ伝送システム」に関する日本の新規提案が8月21日締め切りで国際投票にかけている状況下にある。
- ・ 今年11月10－15日のメキシコでの会議のアジェンダが決定した。
- ・ これから小委員会での体制を検討する。

流量観測高度化小委員会報告

合同観測を以下の2河川で実施した。

魚野川、石狩川

魚野川(信濃川支川)

日時:2013年4月19日(金)~21日(日)

観測地点:新潟県魚沼市堀之内、根古屋橋

観測項目

1. ADCPによる横断面内流速計測
2. 投入浮子の追跡
3. 遠赤外カメラによる撮影
4. 通常ビデオカメラによる撮影
5. 電波流速計による計測
6. ADCP搭載のRiver Boatによる複数断面計測
7. 電磁流速計による計測
8. プライス式流速計による計測
9. 水位の縦断計測

参加者・見学者(合計60名程度)敬称略

神戸大、東京理科大(二瓶)、富山県立大学、山口先生、高知高専、土木研究所、FRICS、
水文環境、パシフィックコンサルタント、ハイドロシステム開発、東京建設コンサルタント、
横河電子機器、ニュージェック



平成25年度 土木学会流量観測高度化小委員会合同観測

2013年4月18日～21日

新潟県魚沼市堀之内地先 信濃川水系魚沼川（根小屋橋）

石狩川

日時:2013年5月1日(水)~2日(木)

観測地点:橋本町観測所、石狩川橋

観測項目

魚野川観測と同様

参加者・見学者(合計20名程度)敬称略

土木研究所、福田水文センター、ハイドロシステム開発、横河電子機器

今後の予定

流量勉強会と黒部川視察の実施

勉強会

日時:2013年7月26日(金)

場所:富山県立大学

黒部川視察

7月27日(土)

・来年度の合同観測は、黒部川を対象

水害対策小委員会

活動報告

小委員会メンバー

委員	・小委員会委員長(1名)	堀智晴	京都大学防災研究所	
	・幹事(8名, 各支部から1名)	中津川誠	室蘭工業大学	
		風間聡	東北大学	
		二瓶泰雄	東京理科大学	
		武田誠	中部大学	
	(幹事長兼務)	竹林洋史	京都大学防災研究所	
		岡田将治	高知工業高等専門学校	
		赤松良久	山口大学	
		矢野真一郎	九州大学	
	・国土交通省本省(1名)	佐藤 寿延	国交省 水管理・国土保全局 治水課	
	・国土交通省テックフォース(1名)	黒川 純一良	国交省 水管理・国土保全局 防災課	
	・国の研究所(2名)	佐山敬洋	ICHARM	
		杉原 直樹	国総研 河川研究部 水防災システム研究官	
	・コンサルタント(3名)	市山誠	パシフィックコンサルタント	
	中村謙一	建設技術研究所		
	未定	未定	依頼中	
・前水工学委員会委員長(1名)	寶馨	京都大学防災研究所		
オブザーバー	・消防(1名)	鈴木隆史	南信州広域連合飯田広域消防本部	
	・レスキュー(1名)	佐藤孝洋	スペシャルレスキューサービスジャパン(株)	依頼中
	・各支部調査団組織責任者	清水康行	北海道大学	
		田中仁	東北大学	
		清水義彦	群馬大学	
		辻本哲郎	名古屋大学	
		藤田一郎	神戸大学	
		中野晋	徳島大学	
		前野詩朗	岡山大学	
		小松利光	九州大学	
	・コンサルタント(若干名)	未定	未定	依頼前
	・合同調査を実施する組織(若干名)	未定	土木学会地盤工学委員会等	依頼前
	・その他の災害・防災関連組織(若干名)	大石哲	神戸大学都市安全研究センター	

これまでの活動

2013年3月： 小委員会発足

2013年5月～： ヨーロッパ水害の情報収集

過去の土木学会水工学委員会による水害調査報告書の収集
各支部幹事による河川財団への予算申請のための準備

2013年6月： 2013年度第一回小委員会幹事会開催

今後の活動(2013年度)

2013年7月： 小委員会Facebook及びHPの立ち上げ

2013年度第一回小委員会開催

水害発生時の水工学委員会対応マニュアルの作成

2013年7月～： インド水害の情報収集

水害発生時の対応

他学協会・消防・レスキュー等との連携・交流

2014年3月： 河川災害シンポジウム開催

2013年度第二回小委員会開催

水理実験指導書改訂小委員会報告

資料7 - 9

・委員会構成

藤田一郎	神戸大学大学院工学研究科	市民工学専攻
神田佳一	明石工業高等専門学校	都市システム工学科
岡田将治	高知工業高等専門学校	環境都市デザイン工学科
宇野 宏司	神戸市立工業高等専門学校	都市工学科
三輪 浩	舞鶴工業高等専門学校	建設システム工学科
和田 清	岐阜工業高等専門学校	環境都市工学科
内田龍彦	中央大学研究開発機構	
山上路生	京都大学工学研究科	社会基盤工学専攻
椿 涼太	広島大学大学院	社会環境システム専攻

・第1回小委員会議事録

日時:2013年3月6日15:00-17:30

場所:名城大学, S209演習室

出席者:藤田, 神田, 三輪, 岡田, 宇野, 内田, 椿, (欠席, 和田, 山上)

議 題

1. 各委員の紹介(資料1-3)

2. アンケートの中間集計結果について(資料1-6)

宇野先生から集計結果のPPTによる説明があった。29件の回答があったが、高専からの回答が少なかったため、引き続きwebでのアンケートを3月末まで継続することとした。また、水工学委員会での報告についても説明した

3. 各委員からの意見の集約結果について

資料1-2に基づいて各委員からの意見を確認した。

4. 各大学・高専の試みの紹介

広島大学, 神戸大学, 舞鶴高専のテキスト(資料1-4,1-5,1-7,1-8)などを用いた説明, および各委員の担当する実験について説明があり, 意見交換した。

5. 実験項目の整理, 意見交換

6. 付表・付録の内容

7. 役割分担

検討事項

意見交換の結果、以下のような実験項目の変更・追加、役割分担などを決定した。

1. 指導書のサイズはA4版に変更する
2. 指導書の名称を、「水理実験解説書」に変更する ⇒ 変更可能かどうか確認が必要
3. データシートはウェブからもダウンロードできるようにする。ただし、どこからダウンロードできるようにするか（土木学会HPで会員番号入力？ or 出版社のHP, etc.）については今後の検討が必要。水理公式集の様子も見て判断する
4. 平成13年度版の原稿があるかどうか調査する ⇒ 岩西さんに問合せ中（藤田） ⇒⇒ 旧原稿はないことが判明
5. 原稿の提出方法（文章と図面）について確認する ⇒⇒ 新規に作成する必要あり
6. 定価は現在1000円だが、1500円までなら大丈夫ではないかと思われる ⇒ 今後の検討事項
7. 可能ならカラーの口絵をつける
8. 原稿の執筆状況がわかるウェブサイトを立ち上げる（宇野先生提案）
⇒⇒ 椿先生の提案で共有のSkyDriveをすでに立ち上げて過去の資料や原稿のアップロードを実施している
9. 目次と担当は以下の通りとする（赤字は、旧版からの変更が大きい項目や追加項目）

目次案と今後の予定

第1章 静止流体の力学

- 1.1 マノメーターによる圧力差の測定 [宇野]
- 1.2 浮体の安定 [神田]

第2章 ベルヌーイの定理の応用

- 2.1 セキの検定 [岡田]
- 2.2 ベンチェリメーターによる流量の測定 [岡田]
- 2.3 オリフィスからの流出 [岡田]

第3章 運動量保存則の応用-

⇒ 旧版の3.1を2分割する

- 3.1 受圧板による流量の測定 [和田]
⇒ ここでは受圧板の説明のみ行う
- 3.2 旧版の関連知識の部分を拡大 [和田]

第4章 管水路の水理

- 4.1 層流と乱流 [三輪]
- 4.2 管水路流速分布の測定 [宇野]
- 4.3 管水路の摩擦損失 [椿]
- 4.4 管水路の形状損失 [椿]

第5章 開水路の水理

- 5.1 常流・射流と跳水 [三輪]
- 5.2 水門からの流出 [神田]
- 5.3 開水路流速分布の測定 [三輪]
⇒ データのデジタル処理について説明を追加
- 5.4 開水路の等流・不等流 [神田]
⇒ 堤防の話を加える

第6章 波の力学 → 旧版の6.1を2分割する

- 6.1 平面波の性質 [和田]
- 6.2 波の性質 [和田] → 津波の話(東北大震災)を加える

第7章 流れの力学

- 7.1 相対的静止 [宇野]
- 7.2 流線・流跡線・流脈線 [宇野]
- 7.3 カルマン渦 [藤田]

データシート

付表 [岡田]

付録

- 付録A ミニ実験水路の試作 [藤田]
- 付録B 流出関係 [藤田]
- 付録C マリオット瓶 [山上]
- 付録D ペットボトル [山上]
- 付録E 円形跳水関係 [内田]
- 付録F 抗力関係 [内田]

今後の予定

第2回小委員会2

2013年9月 全国大会の際に開催し、各自の原稿を持ち寄って検討

⇒⇒ **8月29日(神戸大)に変更**

第3回小委員会2014年4～5月 神戸で開催し、最終原稿へ調整する

指導書のテンプレート

1.1 マノメータによる圧力差の測定

1. 目標

(1)

(2)

...

2. 使用設備および器具

(1)

(2)

...

3. 実験要領

(1)

(2)

...

4. 注意事項

(1)

(2)

...

5. 結果の整理

(1)

(2)

...

6. 関連知識

(1)

(2)

...

7. 設問

(1)

(2)

...

Web上でのファイル共有 ⇒MicrosoftのSkyDriveを利用中

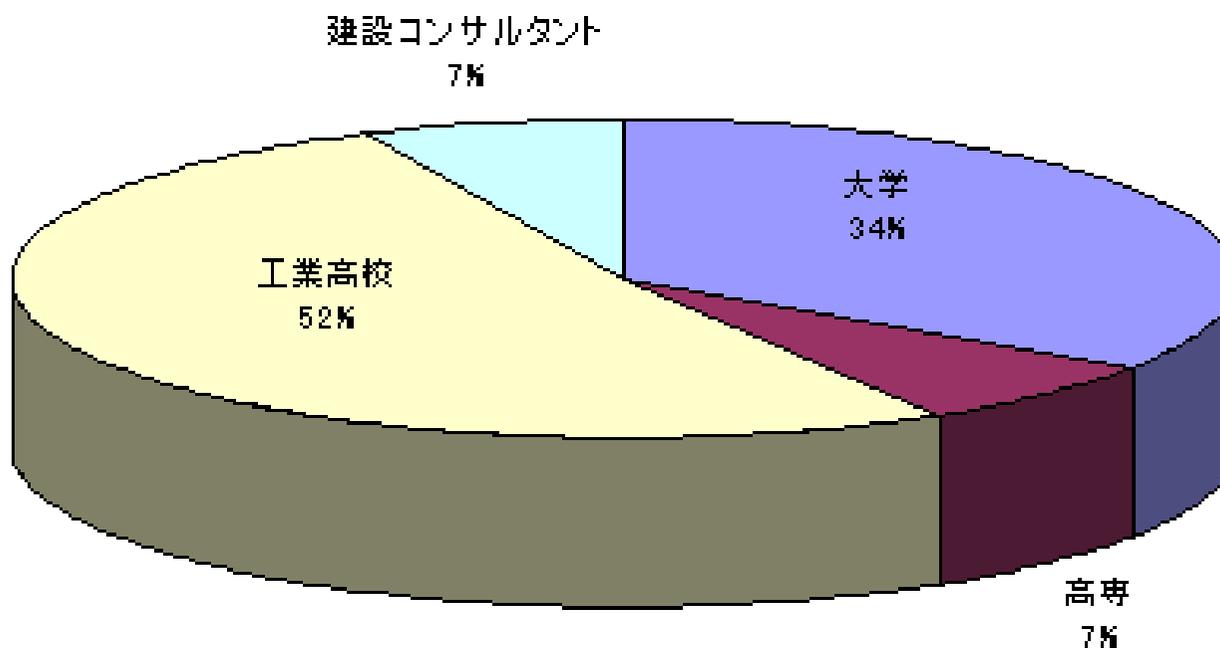


130306 水理実験指導書改訂小委員会

アンケート集計中間報告

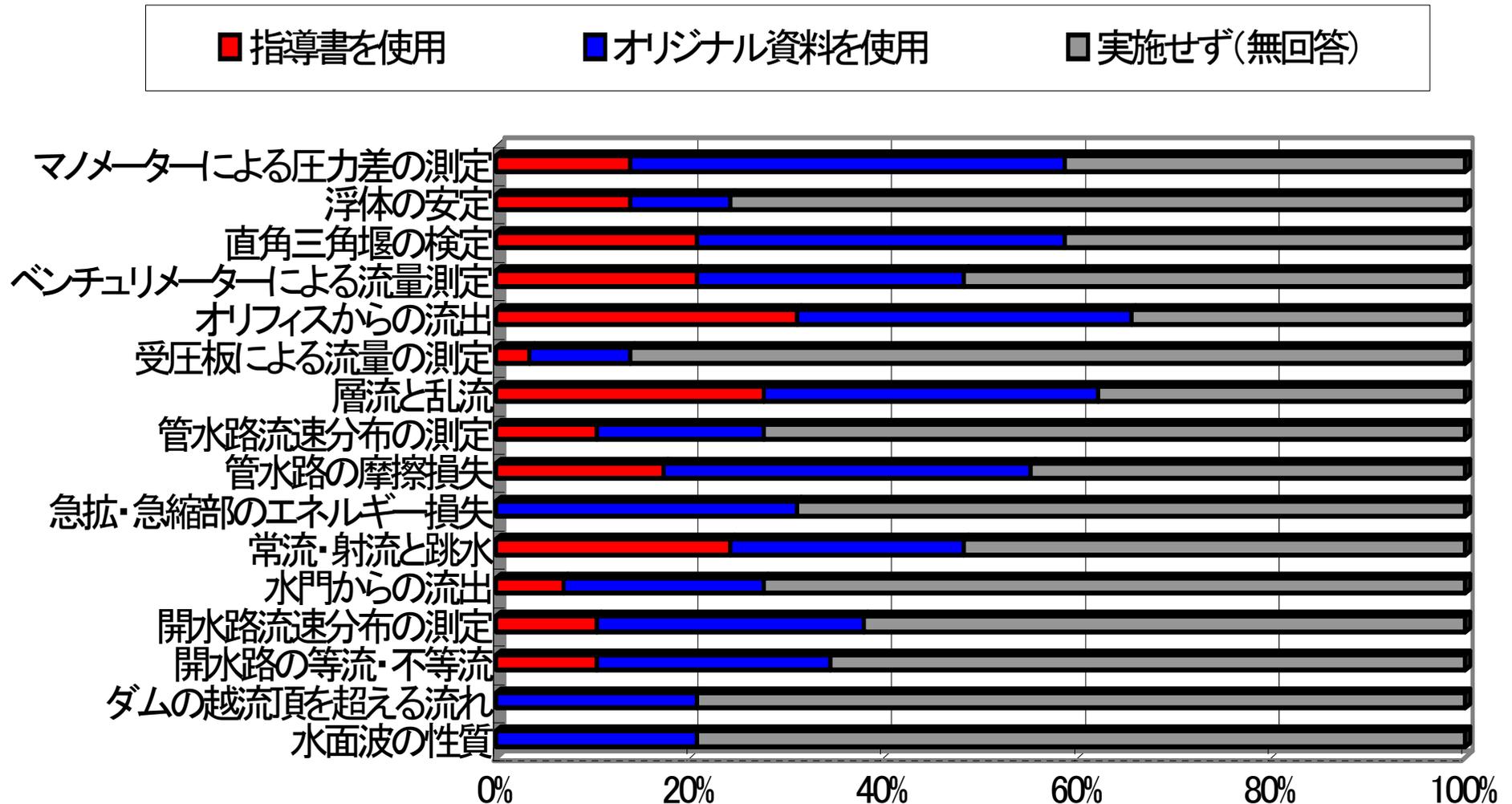
神戸高専
宇野宏司

1. 回答者属性



- 工業高校からの回答が多い
- 活用していると思われる高専からの回答が少ない

2. 実験項目の選択状況



赤字は「指導書を資料している」との回答も多かった実験項目

- ベスト5
 - ◆オリフィスからの流出
 - ◆層流と乱流
 - ◆マンメータによる圧力差の測定
 - ◆直角三角堰の検定
 - ◆常流と射流 ◆ベンチュリメータによる流量測定
- 逆に人気がないのは
 - ◆受圧版 ◆ダム超流 ◆水面波

3. その他, 各機関で実施されている水理 実験の項目

- 水中を落下する物体に働く力
- 四角ゼキの検定
- 球の沈降実験 ストークスの法則の確認, 球の最終沈降速度の測定, 抗力係数の算出
- 振動流実験 周期・振幅の異なる振動流中で形成される河床形態の確認
- 浸透流実験 一様粒径のガラスビーズを流れ地下水の水
面形の測定とDupuitの式から得られる理論式との比較
- 密度流カルマン渦
- 流速・水圧測定・サイフォン(オリジナル資料を使用)
- 最初に、水の単位体積重量に関する実験を実施している
- 段波の水理量計測

4. 指導書の良い点・改善点（自由記述）

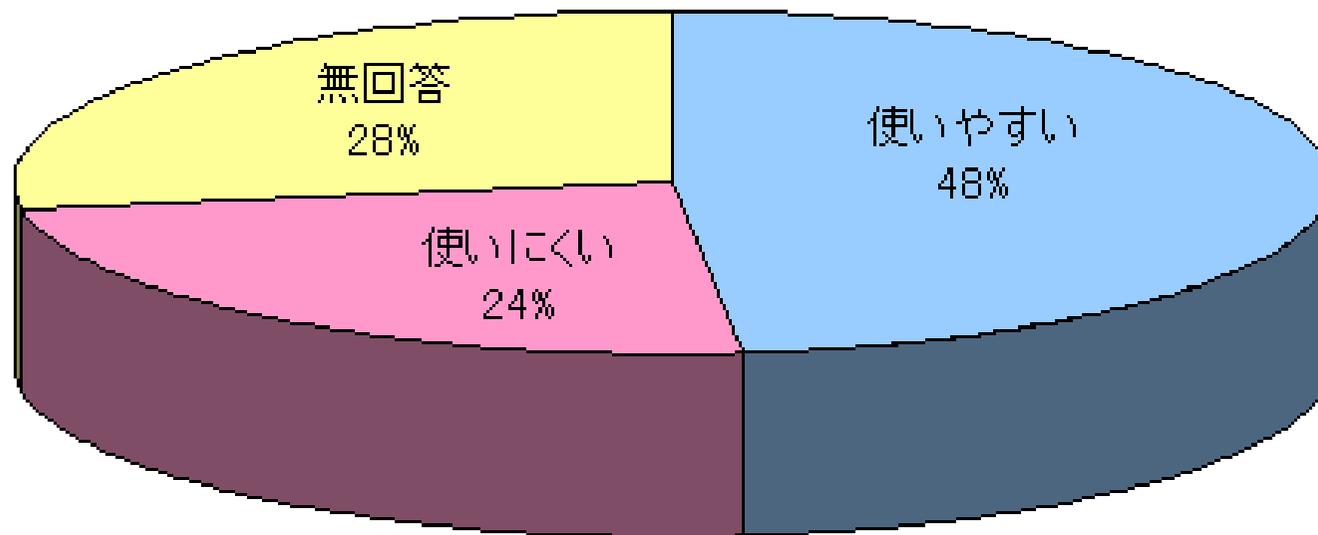
【良い点】

- 常流と射流の説明は丁寧で分かりやすい
- 現在使用していませんが、理論的にもよく書かれていると思います。

【改善点】

- 学生のレベルが低下してきているので、もう少し解説があった方がよい。どの学校もカリキュラム上全ての実験を行うことができないと思うので、時間数別(回数)に応じて推奨する実験の組み合わせを提案するのはどうでしょうか。
- もっと基本的な水理実験（模擬ポテンシャルflow, 地下水なども・・）を行うことがあっても良い
- 各実験装置にあった指導書を使用された方がいいと思います。また、高校では、実験内容に時間的制限があるため、すべての実験に対応できていないのが現状です。

5. データシートの使い勝手



- 概ね好評のようである

6. データシートの良い点・改善点(自由記述)

【良い点】

- 特になし (…)

【改善点】

- PCでデータ整理を行う場合があるため、電子ファイル版があればより使いやすい。
- グラフ作成において、見えにくかったり、記載例を挙げて頂いた方が良いと思います。複数回行いたい実験については、コピーができるようにして頂ければ幸いです。
- グラフの部分がもう少し大きく広くすべき

7. 追加・削除することが好ましい事項

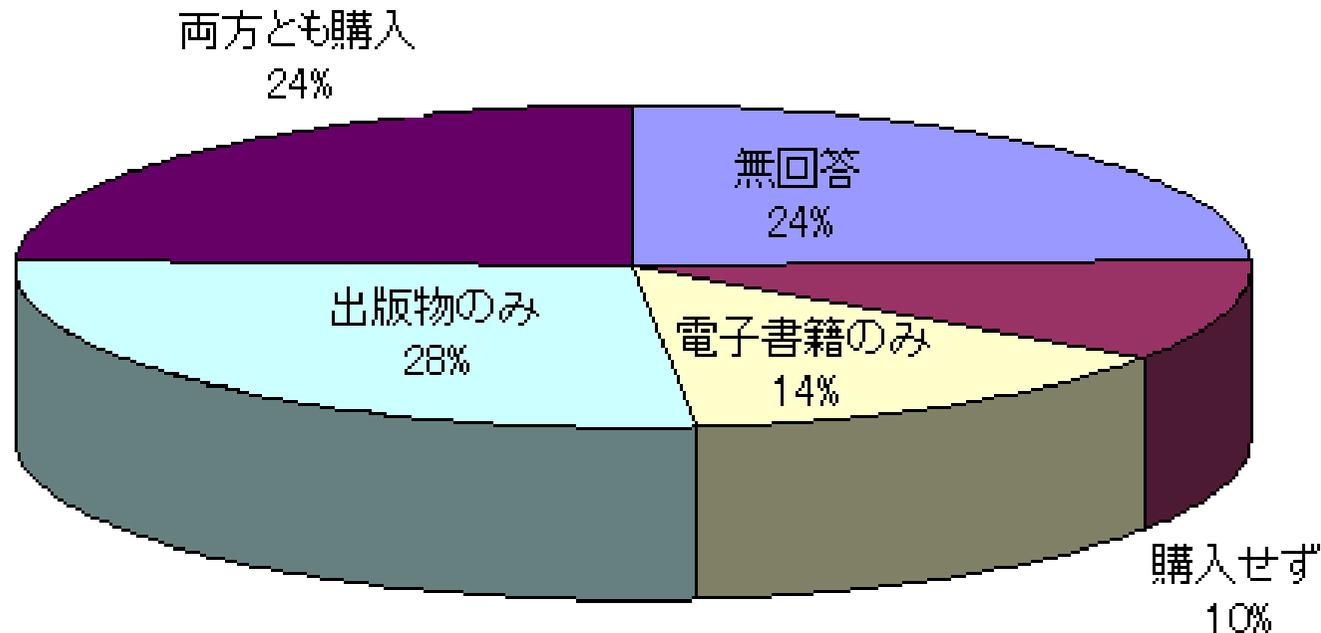
【追加事項】

- 補助的な教材として、Excelプログラムは良いと思う。
- もっと基本的な水理実験（模擬ポテンシャル flow, 地下水なども・・・）を行うことがあっても良い。

【削除事項】

- 不要と思われるものはない。

8. 出版物の購入意思



- 従来の出版物でも半数が購入予定

9. 全体意見

- 学生の理解レベルが以前に比べて低下しているので、どのレベルを対象とするかによって指導書の内容が大きく変わるのではないかと思います。
- もっと基本的な水理実験と、相似率(則)に関する基礎的な実験があっても良いと思います。
- もし、電子版が出て、定期更新やデータ活用ができるようになれば購入を検討したいと思います。また、タブレット端末でも使用できるソフトであれば、さらに良いと思います。
- 専門的すぎない、高校生向けの指導書がほしい
- 指導書をこれから購入する
- 施設の状態(測定器具など壊れている)、本校の生徒の実態に合わせると、上でチェックした項目に関連した内容にはなっているとは思いますが、実験指導書にしたがった実験をそのまま行うのは無理です。

土木学会論文集編集委員会 B1(水工学)に関する委員構成

- 土木学会論文集編集委員会 編集調整会議：
関根正人 (早稲田大学)
- B部門合同編集小委員会(和文通常号)：
横山勝英 (幹事長, 首都大学東京), 里深好文 (立命館大学),
近森秀高 (岡山大学), 石平 博 (山梨大学)
- B部門英文論文集編集小委員会：
関根正人 (編集委員長, 早稲田大学), 竹林洋史 (幹事, 京大
防災研), 川池健司 (京大防災研), 矢野真一郎 (九州大学),
浅沼 順 (筑波大学), 宮本仁志 (神戸大学), 石平 博
(山梨大学), 横山勝英 (首都大学東京)

以上(敬称略)

土木学会論文集編集委員会

編集調整会議からの報告 [1/3] (関根)

土木学会論文(特集号を含む)が掲載されているJ-Stageから土木学会に対して、以下のような変更の連絡がありました。水工学論文(特集号)を例に説明しますと、これまでは掲載される論文毎にPDFファイルに加えてBIBファイルを提出してきました。

- J-Stageによりますと、このBIBファイルのサポートは2014年3月までで終了となり、受付はその後も行われるものの、いずれかの時期をもって打ち切りとなる。
- その後は、XMLファイルに順次移行していくとされる。

土木学会論文集編集委員会

編集調整会議からの報告 [2/3] (関根)

このため、土木学会論文集編集委員会では、次のような対応を進めていくことが確認されています。

- (1) 変更は書誌情報に限って行うことにし，提出するファイルを「BIBファイルからBIB-XMLファイル」に変更していく。Full-XMLに変更することは考えない。
- (2) 通常号に関しては，現在，BIB-XMLファイルを自動作成するためのツールを開発中である。
- (3) 現時点での案として，「2016年1月受付の原稿ならびに2017年1月に掲載の原稿」から完全移行を目指す。

土木学会論文集編集委員会

編集調整会議からの報告 [3/3] (関根)

これに伴い、水工学論文(特集号)に対する原稿も同様の対応が求められていきます。

- BIB-XMLファイルの作成を外注すると、BIBファイル作成に比べて5~10倍の費用が必要となる。
- ただし、土木学会論文集(通常号)の原稿と同じフォーマットに変更するならば、学会で開発中のツールがそのまま使えることになる。

現時点で喫緊の課題というわけではありませんが、数年先をにらんだ検討が必要であることには変わりはありません。議論を始めるべき時期であると考えます。

以上

流域管理と地域計画の連携方策研究小委員会

日時：平成25年 7月22日（月） 15:00～17:30

場所：中央合同庁舎3号館1階 共用第一会議室

議事：

○H22、23流域計画・流域管理課題評価分科会 採択テーマ成果
発表

・氾濫域におけるPPPによる流域管理及び地域計画の融合に関する研究((社)日本プロジェクト産業協議会 石田有三)

・水害ハザード情報の都市計画系への反映状況の実態把握と都市
計画的手法による市街地が抱えるリスク(東京大学 加藤孝明)

○河川砂防技術研究開発公募における公募課題の検討

CommonMP開発・運営コンソーシアム

全国大会共通セッション

日時:9月4日(水)、14:25-15:55

題目:水・物質循環シミュレーションモデルおよびデータに関する共通基盤の共有と高度化

全国大会研究討論会

日時:9月4日(水)、16:15-18:15)

場所:37号館303、304教室(会場名:I-3)

題目:【研04】水理・水文解析のための汎用プラットフォームの活用と国際展開

水工学委員会報告

タイ国治水対策国際コンペの経過報告

- ①タイ国治水対策国際コンペ概要
- ②概念設計提出概要
- ③日本コンソーシアム概要
- ④国際コンペの経過
- ⑤国際コンペの教訓
- ⑥国際コンペ対応の今後に向けて

平成25年7月25日

(株) 建設技術研究所 天野光歩

平成 25 年 7 月 16 日

水工学委員会
委員長 道奥 康治 殿

公益社団法人 土木学会
調査研究部門 主査理事 安田 進

調査研究拡充支援金の配分について（ご連絡）

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、平成 24 年度の行事関連の収支が確定しましたので、添付資料(1)の「調査研究拡充支援金の部門内での配分について」に従いまして、標記「調査研究拡充支援金」（旧「行事還元金」）の総額を算定し、各委員会への配分額を決定いたしました。

つきましては、平成 25 年度の貴委員会への調査研究費配分額は下記のとおりとなりましたので、ここにお知らせいたします。

今後とも、調査研究活動のさらなる活性化に向けて、ご協力をお願いいたします。

なお、行事関係雑損失*を予算に反映することとなっておりますので、調査研究拡充支援金の計算時に前年度の行事関係雑損失処理に伴う減額措置をとらせていただきました。ご了承のほどお願いいたします。

敬具

※行事関係の未収入金の雑損失処理：

当該年度の収入となるものが種々の理由で年度末までに入金のない場合は、未収入金として貸借対照表の資産に計上しています。事務局では相手先に対して再三再四請求に努めていますが、会計上は、未収入金計上から 2 年を経過し未収のときは、回収の可能性が低いものと判断して雑損失として処理しています（雑損失処理した後の入金は雑収入として計上します）。

記

1. 貴委員会の調査研究費配分額 (単位：円)

(1) 調査研究費（既通知分）	1202000
(2) 調査研究拡充支援金	1581000
合 計	2783000

備考：調査研究拡充支援金総額 1,612 万円

(注) 調査研究拡充支援金の計算方法（添付資料(1)）

黒字委員会の場合

調査研究拡充支援金=(委員会の黒字額)×(基準還元率)

ただし、調査研究拡充支援金は千円未満四捨五入

ここに、

委員会の黒字額=(添付資料(2)の残金小計)－(行事関係雑損失処理に伴う減額分)

行事関係雑損失処理に伴う減額分：添付資料(3)の雑損失処理額小計から、その 25%
(管理費相当額)を差し引いた額

基準還元率：75%

2. 添付資料

(1) 調査研究拡充支援金の部門内での配分について

(調査研究部門会議 平成 22 年 4 月 23 日承認)

(2) 平成 24 年度委員会別行事収支一覧 (貴委員会のみ添付)

(3) 平成 24 年度決算における調査研究部門行事関係雑損失処理一覧 (貴委員会が該当の場合のみ添付)

本件に関する問合せ先：事務局 研究事業課長 沖 いつみ (oki@jsce.or.jp)

以上

JSCE2010の実施状況に関する部門ごとの自己評価(2012年度)

資料9

①基本目標		a1)学術・技術の革新・蓄積・継承		部門名:調査研究部門		
②2010目標		a1-1)先端的学術研究の推進 a1-2)学会発行論文集掲載論文の国際的認知度の向上		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどうか未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要		
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題 ⑤年度末評価(3月)		⑥次年度に向けた課題と対応方針	⑦2008年度からの評価の総括 2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載	
		達成度評価				⑧次年度計画
a1-1) 研究体制の構築および研究の実施	<output指標>水工学講演会および水工学論文集による学術研究の推進 <outcome指標>水工学講演会プログラムおよび関連行事の工夫による参加者相互の意見・情報交換の活性化	<output指標>土木学会論文集B1(水工学)Vol. 69/水工学論文集第57巻を2013年2月に発行するとともに、2013年3月5～7日の期間に名城大学天白キャンパスにおいて第57回水工学講演会を開催した(投稿論文数386編、採択論文数303編、参加者総数516名)。また、同期間内、アゲールシンポジウム(参加者167名)および河川災害に関するシンポジウム(参加者数175名)を開催した。 <outcome指標>水工学講演会時に同時開催しているアゲールシンポジウムと河川災害に関するシンポジウムについて、昨年度からこれらのシンポジウムを同日連続開催する方式に変更し、今年度も同様なプログラム編成としたが、昨年度よりさらに参加者数の増加と活発な議論を促すことができた。また、この水工学講演会において、昨年度より国際セッションの中に東南アジアセッションを特別に設けているが、昨年度は1セッション・6編の発表だったのに対し、今年度は2セッション・10編の発表に加え、東南アジアでの水工学的課題を一同に議論する機会として捉えられ、この分野の学術水準の向上を図ることに繋がりは始めている。さらに、同講演会では、学生参加者と研究者との交流を促す工夫を試みることにし、交流会参加者を大幅に増やすとともに、活発な意見・情報交換の場とすることができた。	A	次年度も、当委員会としての最大行事である水工学講演会(2014年3月4～6日、神戸大学)の開催ならびに、土木学会論文集B1(水工学)Vol. 70/水工学論文集第58巻の発行準備を進める。この際、今年度取り組み成功させた様々な改革・工夫をさらに進め、査読編集作業の円滑化や講演会での議論を活発化させる講演会プログラム構成検討などに取り組む。	A	
	<output指標>講演会・講習会・研究会の開催による学術研究の推進 <outcome指標>部会・小委員会等による研究活動の活性化	<output指標>流量観測高度化小委員会:流量観測現地ワークショップ(2012年4月19～22日、新潟県魚野川、参加者30名)、流量観測高度化小委員会:流量観測現地ワークショップ(2012年5月18～20日、北海道石狩川、参加者30名)、環境水理部会研究集会(2012年5月21～23日、水俣市、参加者62名)、超過洪水シンポジウム～豪雨災害等調査活動から得られたレベルに応じた洪水の概念を考える～(2012年5月25日、土木学会AB会議室、参加者78名)、基礎水理部会:河川流・河床変動解析ソフトウェアIRIC V2.0発表・説明会(2012年5月25日、土木学会講堂、参加者128名)、河川技術に関するシンポジウム(2012年6月21～22日、東京大学、参加者390名)、第48回水工学に関する夏期研修会(2012年8月27～28日、北海道大学、Aコース参加者134名)、基礎水理部会現地見学会(2012年10月21～22日、熊本県、参加者11名)、地下環境水文学に関する研究集会(2012年11月10～11日、香川大学、参加者16名)、環境水理部会・河川部会合同シンポジウム(2012年11月22日、神戸大学、参加者110名)、基礎水理シンポジウム(2012年12月3日、土木学会講堂、参加者44名)、流域圏シンポジウム(2012年12月14日、川崎市、98名)を開催した。また、水工学委員会環境水理部会が中心となり(水工学委員会が推薦)、「流域圏における放射性物質・化学物質の動態が生物環境に及ぼす影響」と題する平成24年度重点研究を実施した。 <outcome指標>上記output指標に列挙したほとんどの催しは、水工学委員会の中に設けられた部会および小委員会によって企画・実施されたものであり、その場での議論のみならず、立案・準備プロセスにおける情報交換が研究活動の活性化に繋がった。また、こうした催しではないものの、ISO/TC113小委員会での検討と流量観測技術高度化小委員会とを連携させるなど、複数の部会・小委員会の課題ごとの協力によりそれぞれの活動を活性化させるなどの新しい試みにも着手し、成果を上げ始めている。	A	部会・小委員会の活性化は高く、これはメンバーの意欲に支えられている。こうした意欲は学術推進の原動力になるものであるが、継続的に活性化を維持するためには、若手メンバーの育成や最低限の予算措置が欠かせないと考えている。このため、部会長・小委員長を含めたメンバー構成の新陳代謝を図るとともに、水工学委員会予算からのサポートおよび学会内外からの競争的資金確保などに積極的に取り組む。	A	<output指標>講演会・講習会・研究会の開催による学術研究の推進 <outcome指標>部会・小委員会等による研究活動の活性化
	<output指標>水災害に関する調査・研究の推進 <outcome指標>水災害に関する調査・研究体制の検討	<output指標>2011年の新潟・福島豪雨災害や台風12号による豪雨災害などをきっかけとして、超過洪水シンポジウム～豪雨災害等調査活動から得られたレベルに応じた洪水の概念を考える～(2012年5月25日、土木学会AB会議室、参加者78名)を開催した。また、2012年7月の九州北部豪雨災害に対して、水工学委員会において調査団を組織し、その成果を、気候変動下の水・土砂災害適応策シンポジウム～亜熱帯化先進地九州から全国へ向けて(2012年12月14日、九州大学)における「平成24年7月九州北部豪雨土木学会調査団報告」、河川災害シンポジウム(2013年3月5日、名城大学)での「平成24年7月12日記録的豪雨による白川水害の実態調査および減災対策の提言」および「平成24年九州北部豪雨災害から学ぶこと」、平成24年度土木学会西部支部研究発表会特別講演会「平成24年7月九州北部豪雨災害の調査研究および提言」(2013年3月9日、熊本大学)、土木学会・地盤工学会「平成24年7月九州北部豪雨による災害調査団合同報告会～繰り返される豪雨災害への備え～」(2013年5月10日、九州大学)において発表した。 <outcome指標>上記output指標に示した超過洪水シンポジウムをきっかけとして、洪水レベルとこれに応じた対応策に関する新たな取り組みが始まった。また、2012年九州北部豪雨災害においては、水工学委員会において調査団を組織し、土木学会西部支部・地盤工学会と協力して調査・解析・報告会等を実施した。とくに、矢部川での被災については、国土交通省と連携して調査が行われた。この災害は極めて広域にわたり発生したものであったため、このように各機関が連携した調査活動が実施され、相互の連携体制の重要性が認識された結果、水工学委員会の中に水害対策小委員会を設置し、統一的な災害調査方法の確立・情報共有や消防・レスキュー隊との連携を目指して、水工学委員会における水害調査活動円滑化および水害研究の更なる発展に資する活動を行うこととなった。	A	近年多発している豪雨災害・土砂災害など、当委員会としては、災害調査・報告も重要な活動と位置づけている。このため、人員・資金確保、情報収集・発信など、これに係わる課題を整理し、その解決に取り組むことも必要と考えている。	A	<output指標>水災害に関する調査・研究の推進 <outcome指標>水災害に関する調査・研究体制の確立
	<output指標>水工学に関する研究成果・技術の蓄積・継承 <outcome指標>水工学に関する研究成果・技術等の出版企画	<output指標>2010年度より活動が行われていた「水工学から見た我が国大河川(利根川)の特性と諸課題に関する検討プロジェクト」の成果として、2012年12月に「日本のかわと河川技術を知る～利根川～」を出版した。 <outcome指標>流域圏における水・物質動態に関する研究成果を集大成した教科書「環境水理学」を環境水理部会が中心となって出版企画した。また、前回改訂から14年が経過した水理公式集および11年が経過した水理実験指導書の改定検討作業に着手し、水工技術の進歩・普及・発展および次世代土木技術者養成といった高い社会的意義に鑑み、水工学委員会におけるこれからの重点課題として位置づけることとした。	A	水理公式集および水理実験指導書の改訂については、今年度よりスタートさせたところであり、次年度から具体的な編集作業を開始することとしている。編集作業に要する人員確保・予算措置などのためにも、出版計画を早急に確定させることが必要と考えている。	B	<output指標>水工学に関する研究成果・技術の蓄積・継承 <outcome指標>水工学に関する研究成果・技術等の出版企画
a1-2) 論文掲載基準の厳格な運用と対外広報	<output指標>適正な論文査読と円滑な論文集発行 <outcome指標>論文査読基準の明確化と論文集編集作業の効率化	<output指標>水工学委員会では水工学論文集、JHHE (Journal of Hydrosience and Hydraulic Engineering)論文集および河川技術論文集を発刊している。水工学論文集は2月にCD版として発刊され、これを12月に土木学会論文集B1(水工学)の特集号としてJ-Stage上に掲載した。 <outcome指標>水工学論文集は、土木学会論文集特集号としても位置づけられるため、土木学会論文集としての査読方針に加え、「論文の欠点を指摘するだけでなく、長所・特徴を伸ばす」ことを明記し、これに従った査読が行われるようにした。これは、萌芽的・挑戦的な研究を取り上げることに繋がり、とくに若手研究者の意欲を高めることに寄与した。また、できるだけ専門分野の研究者による査読が行われるよう、独自の専門分野データベースを構築し、査読委員を選定するシステムとしている。このシステムを用いることにより、編集作業の効率化も図られている。一方、JHHE論文集は2012年11月にVol.30/No.2を発刊し、土木学会英文論文集へと引き継がれた。論文集再編にあたり、これらの論文集の今後のあり方、論文の質の向上ならびに査読編集体制の健全化などについての検討も併せて実施してきている。	A	当委員会独自の論文査読システムにより、円滑かつ迅速な査読・論文編集が可能となっているが、その保守・更新が最大の課題となっている。これに要する人員確保・養成および予算措置について取り組む必要がある。また、返却論文に対するアフターケアについても課題が残されており、効率性と論文質向上を両立させる方法についても検討する必要がある。	A	<output指標>適正な論文査読と円滑な論文集発行 <outcome指標>論文査読基準の明確化と論文集編集作業の効率化

①基本目標		a2)社会の構造変化に対応した学術領域の確立		部門名:調査研究部門	
②2010目標		a2-1)経済社会の構造変化に対応した学術領域の再編 a2-2)他機関との連携による萌芽的研究の推進		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどうか未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要	
		年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題 ⑤年度末評価(3月)		⑥次年度に向けた課題と対応方針	⑦2008年度からの評価の総括 2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載
		達成度評価			

JSCE2010の実施状況に関する部門ごとの自己評価(2012度)

①基本目標		a1)学術・技術の革新・蓄積・継承		部門名:調査研究部門		
②2010目標		a1-1)先端的学術研究の推進 a1-2)学会発行論文集掲載論文の国際的認知度の向上		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどうか未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要		
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題 ⑤年度末評価(3月)		⑦2008年度からの評価の総括		
		活動内容	達成度評価	⑥次年度に向けた課題と対応方針	2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載	
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	活動内容	達成度評価	⑥次年度に向けた課題と対応方針	⑧次年度計画	
a2-1) 土木構造物の長寿命化・維持管理技術や社会基盤の有効活用の研究推進	<output指標>水工構造物の維持管理に資する技術課題解決に向けた研究の推進 <outcome指標>水工構造物の維持管理に資する技術課題解決に係る研究情報の集積・発信	<output指標>「水工学から見た我が国大河川(利根川)の特性と諸課題に関する検討プロジェクト」を2010年度より継続実施し、利根川を例として、河川管理施設に関する歴史的経緯・課題・対策についても検討された。また、本プロジェクトを他河川にも広げる計画を立案することになった。また、堆砂によるダム機能低下の課題に対応するため、全国大会研究討論会において「流水型(穴あき)ダムの新しい展開と今後の可能性」と題する企画を実施し、ダム機能の維持管理に係る最新技術の研究が議論された。 <outcome指標>「水工学から見た我が国大河川(利根川)の特性と諸課題に関する検討プロジェクト」の成果として、2012年12月に「日本のかかわり河川技術を知る～利根川～」を出版し、これまでに集積された知見の発信を行った。また、全国大会研究討論会「流水型(穴あき)ダムの新しい展開と今後の可能性」では、出席者数は35名と必ずしも多くはなかったが、配付資料はその倍ほど無くなり、この問題に係る最新研究成果に対するニーズの高さが裏付けられた。	A	事例研究とその成果集約という面では目標を達成できたが、これらを継続させる方策そのものに課題が存在する。トピックス的な事象に対する検討だけでなく、水工構造物の維持管理に関する取り組み戦略を立案する必要がある。	社会構造の変化に対応した学術領域の再編までには至っていないものの、事例研究の推進は達成できており、今後の進め方が重要になると考えている。	<output指標>水工構造物の維持管理に資する技術課題解決に向けた研究の推進 <outcome指標>水工構造物の維持管理に資する技術課題解決に係る研究情報の集積・発信
a2-2) 土木学会の特質を活かした研究テーマの提案	<output指標>国内外の関連分野(産官学)ならびに異分野の組織との研究推進 <outcome指標>国内外の関連分野(産官学)ならびに異分野の研究組織との連携	<output指標>2012年九州北部豪雨災害に対して、水工学委員会において調査団を組織し、土木学会西部支部・地盤工学会と協力して調査・解析・報告会等を実施した。とくに、矢部川での被災については、国土交通省と連携して調査が行われた。この災害は極めて広域にわたり発生したものであったため、このように各機関が連携した調査活動が実施されるとともに、その報告会もこうした連携の下、次のように各所で行われた。気候変動下の水・土砂災害適応策シンポジウム～亜熱帯化先進地九州から全国へ向けて(2012年12月14日、九州大学)における「平成24年7月九州北部豪雨土木学会調査団報告」、河川災害シンポジウム(2013年3月5日、名城大学)での「平成24年7月12日記録的豪雨による白川水害の実態調査および減災対策の提言」および「平成24年九州北部豪雨災害から学ぶこと」、平成24年度土木学会西部支部研究発表会特別講演会「平成24年7月九州北部豪雨災害の調査研究および提言」(2013年3月9日、熊本大学)、土木学会・地盤工学会「平成24年7月九州北部豪雨による災害調査団合同報告会～繰り返される豪雨災害への備え～」(2013年5月10日、九州大学)。また、国土交通省と連携した「河川懇談会」や土木計画学委員会および国土交通省と連携した「流域管理と地域計画の連携方策研究小委員会」などの活動も継続させている。 <outcome指標>上記output指標に記述した活動に加え、水工学分野における国際組織であるIAHRとの情報交換を通じて、土木学会会員の国際的プレゼンスを示すため、当委員会メンバーが中心となって、IAHR Japan Chapterが昨年度創設され、昨年度に引き続き、その会合も実施した。また、沿岸環境関連学会連絡協議会と連携して、流域圏シンポジウムを開催し、複数の分野に跨る流域圏での水・物質動態に関わる課題への取り組みを実施することが出来た。	A	災害調査にあたっては、国土交通省などの関係省庁との連携は必須であり、河川懇談会などの組織を活用しながら、今後もさらなる連携を深めていく。なお、災害調査のための資金の確保が、検討すべき重要課題となっている。	国内外の産官学関連分野や異分野との連携推進に意識的に取り組むことができている。	<output指標>国内外の関連分野(産官学)ならびに異分野の組織との研究推進 <outcome指標>国内外の関連分野(産官学)ならびに異分野の研究組織との連携
①基本目標		a3)災害対応技術の確立		部門名:調査研究部門		
②2010目標		a3-1)災害対応技術の体系化		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどうか未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要		
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題 ⑤年度末評価(3月)		⑦2008年度からの評価の総括		
		活動内容	達成度評価	⑥次年度に向けた課題と対応方針	2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載	
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	活動内容	達成度評価	⑥次年度に向けた課題と対応方針	⑧次年度計画	
a3-1) 他機関との連携および共同研究の推進	<output指標>多発する水災害に対応した、防災関連他機関との共同調査・研究の推進 <outcome指標>多発する水災害に対応した、防災関連他機関との臨機で多様な形態での連携	<output指標>2012年九州北部豪雨災害では、当委員会の小松利光顧問を団長とする調査団を、土木学会西部支部・地盤工学会と協力して組織し、調査・解析・報告会等を実施した。とくに、矢部川での被災については、国土交通省と連携して調査が行われた。この災害は極めて広域にわたり発生したものであったため、このように各機関が連携した調査活動が実施されるとともに、その報告会もこうした連携の下、各所で行われた。 <outcome指標>水工学委員会の中に水害対策小委員会を設置し、統一的な災害調査方法の確立・情報共有や消防・レスキュー隊との連携を目指して、水工学委員会における水害調査活動円滑化および水害研究の更なる発展に資する活動を行うこととした。	A	東日本大震災を受け、水工関連施設に関する検討を進める必要性が高まっているものの、一方では、豪雨災害も頻発しており、これら両者に対応する体制の維持について検討が必要となっている。また、調査費用の確保も重要な課題として残されている。	東日本大震災のみならず、近年頻発する豪雨災害を受け、産官学の他機関と迅速な連携のもとに、災害調査を実施することができている。また、水害対策小委員会を設置し、統一的かつ迅速な対応を可能とした。	<output指標>多発する水災害に対応した、防災関連他機関との共同調査・研究の推進 <outcome指標>多発する水災害に対応した、防災関連他機関との臨機で多様な形態での連携
①基本目標		a4)都市再生に資する技術の確立		部門名:調査研究部門		
②2010目標		a4-1)計画・制度、社会基盤施設の維持管理など要素技術の確立 a4-2)都市空間形成技術の確立		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどうか未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要		
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題 ⑤年度末評価(3月)		⑦2008年度からの評価の総括		
		活動内容	達成度評価	⑥次年度に向けた課題と対応方針	2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載	
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	活動内容	達成度評価	⑥次年度に向けた課題と対応方針	⑧次年度計画	

JSCE2010の実施状況に関する部門ごとの自己評価(2012度)

①基本目標		a1)学術・技術の革新・蓄積・継承		部門名:調査研究部門			
②2010目標		a1-1)先端的学術研究の推進 a1-2)学会発行論文集掲載論文の国際的認知度の向上		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどうか未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要			
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題 ⑤年度末評価(3月)		⑥次年度に向けた課題と対応方針	⑦2008年度からの評価の総括 2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載	達成度評価	⑧次年度計画
		活動内容					
a4-1) 関連する要素技術の研究推進	<output指標>都市・地域再生に資する水制御要素技術の抽出とその体系化 <outcome指標>都市・地域再生に資する水制御技術に関する産官学・複数分野の横断的連携および研究の推進	<output指標>「水工学から見た我が国大河川(利根川)の特性と諸課題に関する検討プロジェクト」を2010年度より継続実施し、利根川を例として、水工学的観点から治水・利水・水環境に関する水制御技術の体系化が図られた。また、堆砂によるダム機能低下の課題に対応するため、全国大会研究討論会において「流水型(穴あき)ダムの新しい展開と今後の可能性」と題する企画を実施し、ダム機能の維持管理に係る最新技術の研究結果が議論された。 <outcome指標>「水工学から見た我が国大河川(利根川)の特性と諸課題に関する検討プロジェクト」では、当委員会メンバーのみならず、産官学様々な分野の専門家が議論を重ね、こうした連携によって、2012年12月に「日本のかかわる河川技術を知る～利根川～」が出版された。	A	事例研究とその成果集約という面では目標を達成できたが、これらを継続させる方策そのものに課題が存在する。トピックス的な事象に対する検討を体系化することが重要であり、次年度より編集作業を開始する水理公式集の改訂において取り組む必要がある。	事例的ではあるものの、要素技術の抽出は達成できた。	B	<output指標>都市・地域再生に資する水制御要素技術の抽出とその体系化 <outcome指標>都市・地域再生に資する水制御技術に関する産官学・複数分野の横断的連携および研究の推進
a4-2) 多角的な時空間を考慮した調査研究の推進	<output指標>都市を内包する流域圏における環境保全技術に関する調査・研究の推進 <outcome指標>都市を内包する流域圏における環境保全技術に関する課題の抽出・整理	<output指標>水工学委員会環境水理部会が中心となり(水工学委員会が推薦)、「流域圏における放射性物質・化学物質の動態が生物環境に及ぼす影響」と題する平成24年度重点研究を実施した。また、その成果を、流域圏シンポジウム「流域圏の物質輸送に関する実態評価の現状と課題～陸域から内湾(湖沼)までを俯瞰的に理解する～」(2012年12月14日、川崎市、98名)において発信し、活発な意見・情報交換が行われた。 <outcome指標>重点研究「流域圏における放射性物質・化学物質の動態が生物環境に及ぼす影響」およびこれに係るシンポジウムにより、大気・陸域・海域での広域的物質輸送現象および生態系影響の詳細メカニズムが解明されたと同時に、対象とする現象の多様性・複雑性・広域性・長期性により、「流域圏での物質循環」を共通キーワードとした他分野の研究者による連携推進体制の重要性が共通認識として得られた。	A	環境保全技術に関する検討は、水文部会や河川部会と連携しつつ、環境水理部会が中心となって実施しているが、こうした活動に対する経済的支援が課題となっているため、水工学委員会予算からのサポートおよび学会内外からの競争的資金確保などに積極的に取り組む。	環境水理部会が中心となり、委員会内他部会や学会内外関係組織と連携して、当初目標を達成できている。	A	<output指標>都市を内包する流域圏における環境保全技術に関する調査・研究の推進 <outcome指標>都市を内包する流域圏における環境保全技術に関する課題の抽出・整理
①基本目標		a5)地球環境持続性に関する技術の確立		部門名:調査研究部門			
②2010目標		a5-1)環境目標・基準の設定 a5-2)持続型社会の構築に資する技術の研究 a5-3)地球温暖化緩和・適応技術の確立 a5-4)環境評価技術の確立		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどうか未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要			
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題 ⑤年度末評価(3月)		⑥次年度に向けた課題と対応方針	⑦2008年度からの評価の総括 2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載	達成度評価	⑧次年度計画
		活動内容					
a5-1) 環境目標や基準の設定を支援する調査研究の推進	<output指標>気候変動予測に基づく水環境の目標設定に関する調査研究の推進 <outcome指標>気候変動予測に基づく水環境の目標設定に関する意見・情報交換の活性化	<output指標>水工学委員会内に組織されている地球環境水理学研究小委員会、水文部会ならびに環境水理部会を中心として、気候変動予測に基づく水環境変化等に関する調査研究が推進された。また、2013年3月に開催された第57回水工学講演会(2013年3月5～7日、名城大学、投稿論文数386編、採択論文数303編、参加者総数516名)では、降水過程や水雪水文などのセッションにおいて、全球的な地球環境変化がローカルスケールでの水文現象に及ぼす影響とその対応に関する研究発表が行われた。 <outcome指標>上記output指標に記述した第57回水工学講演会での気候変動による水文過程変化に関する研究発表では、活発な議論が行われた。また、同講演会時に開催された第25回アゲルシンポジウム(参加者167名)では、「水工学における気候変動影響評価の礎(2)」をテーマとして、特別講演「気候モデルの検証と利用」を実施し、気象学、水文学、河川工学、水環境学の専門家による多様な観点からの議論が行われた。さらに、第17回シンポジウム2012 in ぎふ(2012年7月26～27日、岐阜市、参加者716名)を開催し、日本水フォーラムの竹村公太郎代表理事・事務局長による日本水フォーラム報告「災害の21世紀に備えて」および安田孝志愛知工科大学長による基調講演「温暖化によって強化される台風とその脅威」では、気候変動による大規模降水や台風の発生予測による地域水環境への影響とこれに基づく備えについて論じられ、活発な意見交換が行われた。	A	水工学委員会内外の他分野の研究者が連携して取り組むべき内容であるため、地球環境水理学小委員会が中心的な役割を担い、連携調整を図ることが重要となる。このため、まずは本小委員会の人的支援を課題として取り組む。	各部会・各小委員会ごとに、地球環境保全、とくに気候変動に伴う水災害や環境影響に関する研究課題の設定ならびにそれらへの取り組みを鋭意進めることができた。	A	<output指標>気候変動予測に基づく水環境の目標設定に関する調査研究の推進 <outcome指標>気候変動予測に基づく水環境の目標設定に関する意見・情報交換の活性化
a5-2) 自立・循環型都市構造概念の提案	<output指標>極端気象に対応した都市構造・水防対策に関する調査研究の推進 <outcome指標>極端気象に対応した都市構造・水防対策に関する意見・情報交換の活性化	<output指標>ゲリラ豪雨という言葉で代表される短期的局所的降水現象に対応した都市構造・水防対策について、水工学委員会の水文部会および河川部会を中心とした研究が推進された。2012年九州北部豪雨災害では、水工学委員会において調査団を組織し、土木学会西部支部・地盤工学会と協力して調査・解析・報告会等を実施し、都市構造・水防対策等も検討された。 <outcome指標>2011年の新潟・福島豪雨災害や台風12号による豪雨災害などをきっかけとして、超過洪水シンポジウム～豪雨災害等調査活動から得られたレベルに応じた洪水の概念を考える～(2012年5月25日、土木学会AB会議室、参加者78名)を開催し、洪水レベルとこれに応じた対応策に関する新たな取り組み開始のきっかけとなった。また、2012年九州北部豪雨災害の調査研究について、気候変動下の水・土砂災害適応策シンポジウム～亜熱帯先進地九州から全国へ向けて(2012年12月14日、九州大学)における「平成24年7月九州北部豪雨土木学会調査団報告」、河川災害シンポジウム(2013年3月5日、名城大学)での「平成24年7月12日記録的豪雨による白川水害の実態調査および減災対策の提言」および「平成24年九州北部豪雨災害から学ぶこと」、平成24年度土木学会西部支部研究発表会特別講演会「平成24年7月九州北部豪雨災害の調査研究および提言」(2013年3月9日、熊本大学)が開催され、活発な意見・情報交換が行われた。また、2013年度には、土木学会・地盤工学会「平成24年7月九州北部豪雨による災害調査団合同報告会～繰り返される豪雨災害への備え～」(2013年5月10日、九州大学)の開催が予定されている。一方、第17回シンポジウム2012 in ぎふ(2012年7月26～27日、岐阜市、参加者716名)を開催し、分科会1「水との闘いの歴史とこれからの対応・備え」において、過去の水防とこれに対応した都市構造から議論をスタートさせ、現在の極端気象下での対応策について、活発な意見・情報交換が行われた。	A	水工学委員会内外の他分野の研究者が連携して取り組むべき内容であるため、地球環境水理学小委員会が中心的な役割を担い、連携調整を図ることが重要となる。このため、まずは本小委員会の人的支援を課題として取り組む。	各部会・各小委員会ごとに、地球環境保全、とくに気候変動に伴う水災害や環境影響に関する研究課題の設定ならびにそれらへの取り組みを鋭意進めることができた。	A	<output指標>極端気象に対応した都市構造・水防対策に関する調査研究の推進 <outcome指標>極端気象に対応した都市構造・水防対策に関する意見・情報交換の活性化
a5-2) 設計・事業評価基準の確立	<output指標>気候変動下における水工技術に関する研究成果の集約・蓄積 <outcome指標>気候変動下における水工技術に関する研究成果の発信	<output指標>水工学委員会が主体となって刊行してきている水理公式集は、前回改訂から11年が経過し、気候変動影響が顕在化してきた最近の現象への対応やこれに関する最新研究成果の集約が社会的責務となってきている。このため、水工学委員会の中に水理公式集改訂検討小委員会を設置し、改訂編集方針ならびに編集内容に関する検討を開始した。 <outcome指標>水理公式集改訂検討小委員会において、最新の水工技術を含めた調査研究成果の集約・発信方法をその編集方針として議論し、2013年度より実際の執筆作業に取りかかることとした。	B	水工学委員会内外の他分野の研究者が連携して取り組むべき内容であるため、地球環境水理学小委員会が中心的な役割を担い、連携調整を図ることが重要となる。このため、まずは本小委員会の人的支援を課題として取り組む。	各部会・各小委員会ごとに、地球環境保全、とくに気候変動に伴う水災害や環境影響に関する研究課題の設定ならびにそれらへの取り組みを鋭意進めることができた。	A	<output指標>気候変動下における水工技術に関する研究成果の集約・蓄積 <outcome指標>気候変動下における水工技術に関する研究成果の発信

JSCE2010の実施状況に関する部門ごとの自己評価(2012年度)

①基本目標		a1)学術・技術の革新・蓄積・継承		部門名:調査研究部門		
②2010目標		a1-1)先端的学術研究の推進 a1-2)学会発行論文集掲載論文の国際的認知度の向上		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどう未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要		
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題		⑦2008年度からの評価の総括		
		⑤年度末評価(3月)		2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載		
		活動内容		⑥次年度に向けた課題と対応方針		
				達成度評価		
				⑧次年度計画		
a5-3) 地球温暖化緩和・適応技術の提案	<output指標>気候変動予測に基づく水環境変化の推定とその対応策に関する調査研究の推進 <outcome指標>気候変動予測に基づく水環境変化の推定とその対応策に関する意見・情報交換の活性化	<output指標>水工学委員会内に組織されている地球環境水理学研究小委員会、水文部会ならびに環境水理部会を中心として、気候変動予測に基づく水環境変化推定とその対応策に関する調査研究が推進された。また、2013年3月に開催された第57回水工学講演会(2013年3月5~7日、名城大学、投稿論文数386編、採択論文数303編、参加者総数516名)では、降水過程、大気陸面過程、氷雪水文、河川流域環境などのセッションにおいて、全球的な地球環境変化が流域スケールでの水環境に及ぼす影響とその対応に関する研究発表が行われた。 <outcome指標>上記output指標に記述した第57回水工学講演会での気候変動による水環境変化に関する研究発表では、活発な議論が行われた。また、環境水理部会研究集会(2012年5月21~23日、水俣市、参加者62名)、地下環境水文学に関する研究集会(2012年11月10~11日、香川大学、参加者16名)、環境水理部会・河川部会合同シンポジウム(2012年11月22日、神戸大学、参加者110名)、流域圏シンポジウム(2012年12月14日、川崎市、98名)においても同様な情報交換が行われた。さらに、第17回水シンポジウム2012 in ぎふ(2012年7月26~27日、岐阜市、参加者716名)を開催し、分科会2「流域圏への気候変動の影響と水源県の役割」において、気候変動による森林への影響とこれに伴う下流での水環境への波及影響について活発な議論が行われた。	A	水工学委員会内外の他分野の研究者が連携して取り組むべき内容であるため、地球環境水理学小委員会が中心的な役割を担い、連携調整を図ることが重要となる。このため、まずは本小委員会の人的支援を課題として取り組む。	A	<output指標>気候変動予測に基づく水環境変化の推定とその対応策に関する調査研究の推進 <outcome指標>気候変動予測に基づく水環境変化の推定とその対応策に関する意見・情報交換の活性化
a5-4) 各要因の環境への影響の計測技術および環境評価技術の確立	<output指標>気候変動影響評価および流域圏での環境評価に関する調査研究の推進 <outcome指標>気候変動影響評価および流域圏での環境評価に関する意見・情報交換の活性化	<output指標>水文部会・地球環境水理学研究小委員会を中心とした気候変動影響評価に関する調査研究および河川部会・環境水理部会を中心とした流域圏での環境評価に関する調査研究が精力的に推進された。2013年3月に開催された第57回水工学講演会(2013年3月5~7日、名城大学、投稿論文数386編、採択論文数303編、参加者総数516名)では、水文、河川流域環境、河川の水生生物、河川の魚類などのセッションにおいて、水文過程変化が流域圏での水環境・生物環境に及ぼす影響の評価に関する研究発表が行われた。また、水工学委員会環境水理部会が中心となり(水工学委員会が推薦)、「流域圏における放射性物質・化学物質の動態が生物環境に及ぼす影響」と題する平成24年度重点研究を実施し、大気・陸域・海域での広域的物質輸送現象および生態系影響の詳細メカニズムが明らかにされた。 <outcome指標>上記output指標に記述した第57回水工学講演会での気候変動影響および流域圏環境影響にかんする研究発表では、活発な議論が行われた。また、重点研究「流域圏における放射性物質・化学物質の動態が生物環境に及ぼす影響」の一環として開催された流域圏シンポジウム「流域圏の物質輸送に関する実態評価の現状と課題～陸域から内湾(湖沼)までを俯瞰的に理解する～」(2012年12月14日、川崎市、98名)でも、活発な意見・情報交換が行われ、その結果、対象とする現象の多様性・複雑性・広域性・長期性により、「流域圏での物質循環」を共通キーワードとした他分野の研究者による連携推進体制の重要性が共通認識として得られた。	A	水工学委員会内外の他分野の研究者が連携して取り組むべき内容であるため、地球環境水理学小委員会が中心的な役割を担い、連携調整を図ることが重要となる。このため、まずは本小委員会の人的支援を課題として取り組む。	A	<output指標>気候変動影響評価および流域圏での環境評価に関する調査研究の推進 <outcome指標>気候変動影響評価および流域圏での環境評価に関する意見・情報交換の活性化
①基本目標		b1)総合・横断型研究開発の体制確立		部門名:調査研究部門		
②2010目標		b1-1)調査研究部門の委員会再編		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどう未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要		
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題		⑦2008年度からの評価の総括		
		⑤年度末評価(3月)		2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載		
		活動内容		⑥次年度に向けた課題と対応方針		
				達成度評価		
				⑧次年度計画		
b1-1) 検討体制の明確化	<output指標>部会・小委員会による研究活動の活性化および関連組織を含めた相互連携 <outcome指標>部会・小委員会の活動目標の明確化	<output指標>水工学委員会に設置されている4つの部会(水文部会・基礎水理部会・環境水理部会・河川部会)および5つの常置小委員会(地球環境水理学小委員会・東南アジア河川流域研究小委員会・ISO/TC113小委員会・流量観測技術高度化研究小委員会・水害対策小委員会)では、それぞれ個別に調査研究活動を精力的に行い、その成果発表も活発に行われた。また、災害対応や環境影響などの多岐にわたる事象については、沿岸環境関連学会連絡協議会、土木学会他委員会・小委員会、CommonMP開発運営コンソーシアムなどの他組織と相互に連携した活動を進められた。 <outcome指標>上記4部会・5小委員会では、それぞれに次年度の活動目標を定め、これを3月の第2回水工学委員会において報告することとしている。これにより、目標が明確化にできた。なお、水害対策小委員会は同委員会において設置が認められたものであるため、小委員会としての実質的な活動は2013年度からスタートする予定である。	A	部会・小委員会の活性化は高く、これはメンバーの意欲に支えられている。こうした意欲は学術推進の原動力になるものであるが、継続的に活性化を維持するためには、若手メンバーの育成や最低限の予算措置が欠かせないと考えている。このため、部会長・小委員長を含めたメンバー構成の新陳代謝を図るとともに、水工学委員会予算からのサポートおよび学会内外からの競争的資金確保などに積極的に取り組む。	A	<output指標>部会・小委員会による研究活動の活性化および関連組織を含めた相互連携 <outcome指標>部会・小委員会の活動目標の明確化
①基本目標		d1)良質な社会基盤整備への貢献		部門名:調査研究部門		
②2010目標		d1-3)適正な社会決定プロセスの支援・提言 d1-4)入札・契約制度の改善に対する提言		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどう未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要		
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題		⑦2008年度からの評価の総括		
		⑤年度末評価(3月)		2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載		
		活動内容		⑥次年度に向けた課題と対応方針		
				達成度評価		
				⑧次年度計画		

JSCE2010の実施状況に関する部門ごとの自己評価(2012度)

①基本目標		部門名:調査研究部門				
②2010目標		年度ごとの達成度評価規準 A:年度計画どおり実施済み実施完了予定 B:年度計画どおり実施中であり完了するかどうか未定 C:年度計画どおりの実施が未完了又は計画を変更し実施予定 D:アクションプラン自体の変更が必要				
③アクションプラン	④年度計画(2012年度)	年度計画の実施状況と達成度の評価及び今後の課題		⑦2008年度からの評価の総括		
		⑤年度末評価(3月)		2010目標の達成に向けたアクションプランの実施状況の総合評価、アクションプランの変更が必要な場合はその理由等も含めて記載		
		活動内容	達成度評価	⑥次年度に向けた課題と対応方針	達成度評価	⑧次年度計画
d1-3) 合意形成過程への積極的な関与	<output指標>水環境保全ならびに治水・利水対策に関する一般社会への合意形成の促進 <outcome指標>流域圏の歴史を踏まえた極端気象への対応策に関する啓発活動の実施	<output指標>2012年7月26～27日に岐阜市において一般市民・事業者・研究者を対象とした「第17回水シンポジウム2012 in ぎふ」を開催した。参加者総数は、1日目のシンポジウムで699名、2日目の現地見学会で45名、2日間を通しての参加者実数は716名であった。本シンポジウムは、水工学委員会、国土交通省中部地方整備局、岐阜県、岐阜市、岐阜大学および社団法人中部建設協会で構成される実行委員会による主催として開催され、関係業界団体のみならず、岐阜県教育委員会、岐阜市教育委員会、長良川流域環境ネットワーク協議会などの教育関係機関やNPO等も共催・後援としたことにより、一般市民と事業者・研究者はほぼ同数の参加となった。地元紙の岐阜新聞で特集記事が連載されたこともあり、一般参加者を含めた活発な議論が行われ、水環境保全ならびに治水・利水対策に関する一般社会への合意形成に資することが出来た。 <outcome指標>水シンポジウムでは、流域圏の歴史を踏まえた極端気象への対応策に関する啓発を目的として、そのメインテーマを「飛山濃水の恵みと知恵～森と海をつなぐ清流の国ぎふからのメッセージ～」とした。日本水フォーラムの竹村公太郎代表理事・事務局長による日本水フォーラム報告「災害の21世紀に備えて」および安田孝志愛知工科大学長による基調講演「温暖化によって強大化する台風とその脅威」をオープニングとして、我が国および東海地方における気候変動影響について論じられた後、分科会1「水との関いの歴史とこれからの対応・備え」と分科会2「流域圏への気候変動の影響と水源泉の役割」および全体会議がパネルディスカッション形式で行われ、気候変動による地域への影響が議論された。	A	これまで17年間に及び開催してきた水シンポジウムを次年度も継続実施するため、「第18回水シンポジウム2013 in こうち」を開催する予定としている。これまで以上に、コストと労力に対する効果を検証しつつ、市民との合意形成に関する成果を最大限に発揮させられる企画・運営を検討しており、同様な取り組みを2014年度にも継続させられるように検討している。	A	<output指標>水環境保全ならびに治水・利水対策に関する一般社会への合意形成の促進 <outcome指標>津波・洪水などの水災害への対応策と水環境保全に関する啓発活動の実施
d1-4) 入札・契約制度の改善						

2013 年度の会議予定

2013 年 7 月 4 日 (木) 16:00-19:00 第 1 回水工学委員会幹事会 土木学会

2013 年 7 月 25 日 (木) 13:30-16:30 第 1 回水工学委員会 土木学会

2013 年 10 月 3 日 (木) 第 1 回編集小委員会幹事会 土木学会

2013 年 10 月 4 日 (金) 第 2 回水工学委員会幹事会・第 1 回編集小委員会 土木学会

2013 年 11 月 7 日 (木) 第 3 回水工学委員会幹事会・第 2 回編集小委員会 土木学会

2013 年 12 月 13 日 (金) 第 2 回編集小委員会幹事会 土木学会

2014 年 3 月 4 日 (火) 第 2 回水工学委員会 神戸大学

第58回水工学講演会開催予定 Ver130303

開催予定：2013年（平成26年）3月4日（火）～6日（木）

4日(火) 開会式，一般講演・国際セッション，アゲールシンポジウム，河川災害に関するシンポジウム

5日(水) 一般講演・国際セッション，IAHR 日本支部総会，特別講演会，交流会

6日(木) 一般講演・国際セッション，閉会式

- 会場：神戸大学工学研究科キャンパス（神戸市灘区六甲台町1-1）



バス停

- ①神戸市バス 36 系統 神大文理農学部前 (推奨)
- ②神戸市バス 16 系統 神大国際文化学部前

国道・県道・市道

キャンパス内道路

うりぼーロード (遊歩道)



生：神戸大学生協
C：コンビニ

	3/4前	3/4後	3/5前	3/5昼	3/5後	3/5夕	3/6前	3/6後
戎ホール	開会式	アゲール・災害	一般		特別講演会		一般	
教室	6会場・予備1 試写室・休憩室			IAHR	一般		一般	
生協	営業時間 要確認					交流会	営業時間 確認	
seven	基本的に早朝から夜遅くまであいています							

講義棟2~4階

発表・予備 赤

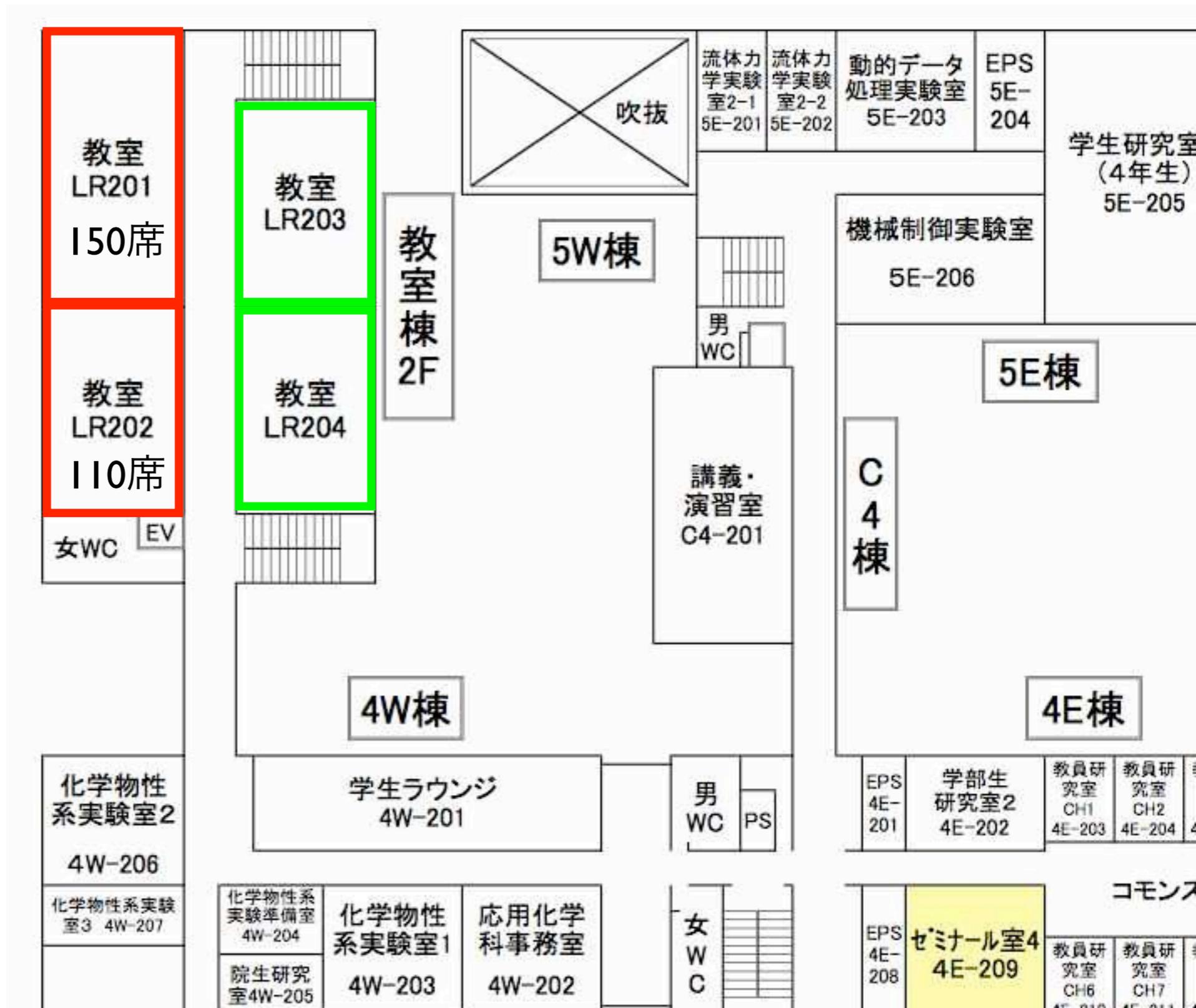
6室 = 2室 × 3階

休憩・会議 緑

6室 = 2室 × 3階

使用は2階2室

3階1室のみ？

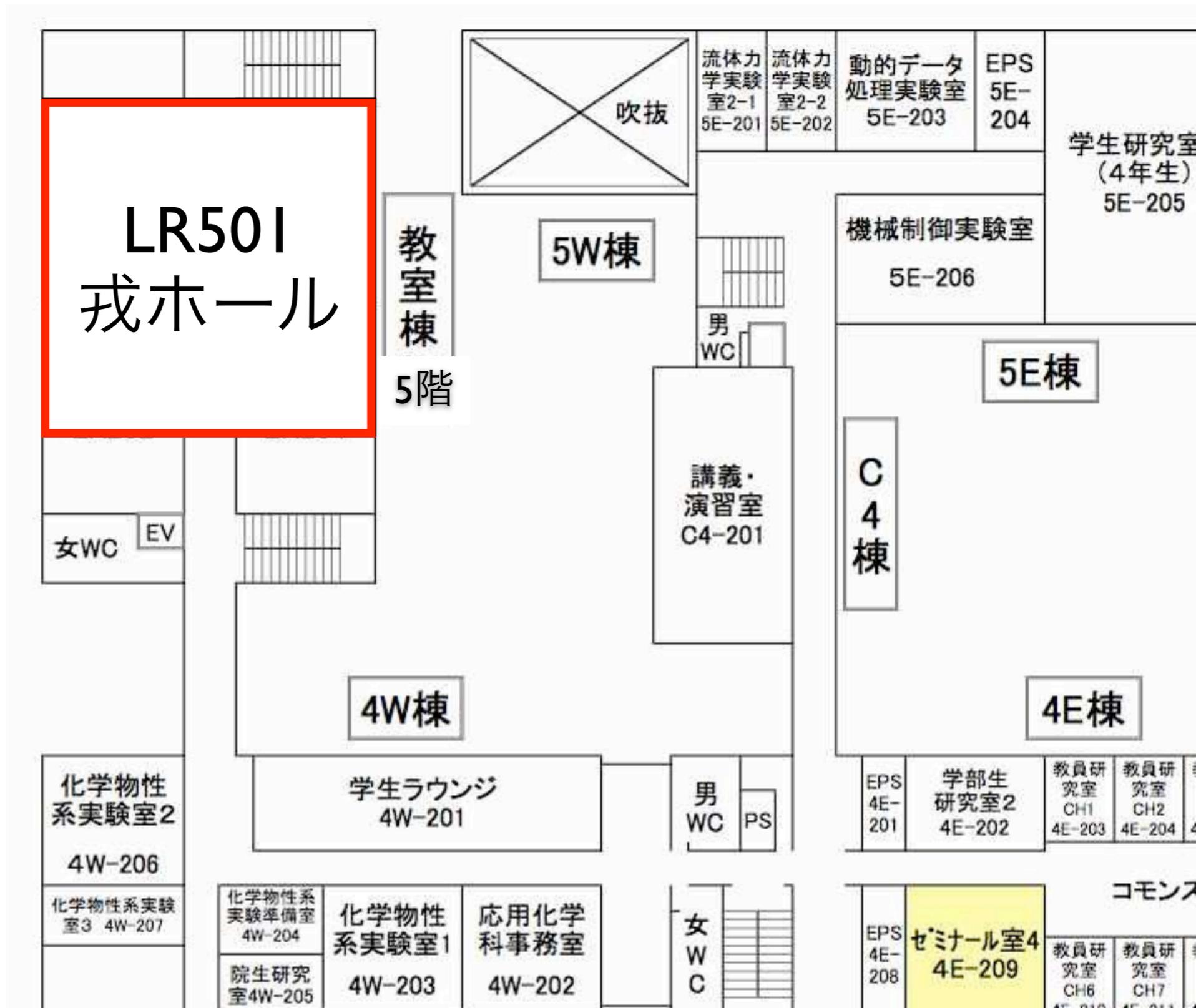


講義棟5階

戎ホール=LR501

1室

赤：発表



- 会場：神戸大学工学研究科キャンパス（神戸市灘区六甲台町1-1）
- 3月4日~6日：一般講演・国際セッション(6セッション6会場, 予備1教室)：講義棟 2~5階 LR201(定員150人), LR202(110), LR301(150), LR302(110), LR401(150), LR402(110), LR501(300)
- 休憩室：LR403(66名)および1階学生ホール
- 試写室：LR303
- 4日：開会式・アゲールシンポ・河川災害シンポ :LR501(300)
- 5日：IAHR 日本支部総会LR401(150)・特別講演会 :LR501(300)
交流会：AMEC3
- 6日：閉会式：講義棟 5階 LR501
- 学生食堂(生協) セブンイレブン
- 3日~6日 実施本部：同上 2F LR203, 会議室 LR202



LR棟入り口



LR棟1階東側
受付など



LR棟1階西側
休憩



LR501 戎ホール
300席

LR201~402 約150席

通常の教室

5人掛×3列×10行



工学系食堂

AMEC 3

セブンイレブン



AMEC3
交流会



2014年度水工学に関する夏期研修会（水工学委員会担当）について

西部地区 委員 鬼東（九工大）、委員兼幹事 杉原（九大）

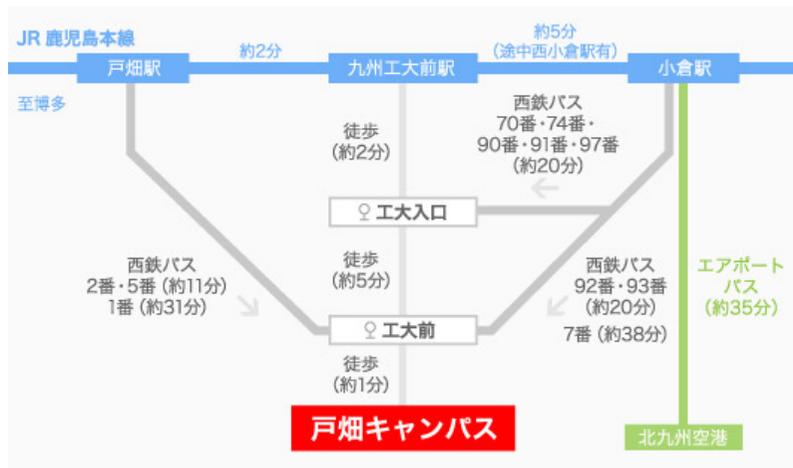
1. 開催日 2014年8月25日（月）～ 8月26日（火）の2日間
2. 会場 九州工業大学戸畑キャンパス 総合教育棟 C-1A講義室、C-2A講義室
〒804-8550 北九州市戸畑区仙水町1-1
URL: <http://www.kyutech.ac.jp/information/map/tobata.html#sub3>
3. 予約状況：2014年8月22日（金）14:00～17:00（会場準備のため）
2014年8月25日（月）、26日（火） 8:00～17:30
Aコース（河川・水文）会場： 総合教育棟1F C-1A講義室（収容人数208名）
Bコース（海岸・港湾）会場： 総合教育棟2F C-2A講義室（収容人数210名）
休憩室： 総合教育棟1F C-1B講義室（収容人数150名）
本部&講師控え室： 総合教育棟1F 共同会議室（収容人数20名）

※日程と会場については海岸工学委員会側の了承が得られたので確定済み。今年度を含めここ3年間は8月最終週の月・火に開催されており、来年度も同様の日程とした。前日の日曜を移動日に使えるため、遠方からも参加しやすいと思われる。Aコースのテーマ・講師案については9月末までに作成予定。

4. 会場へのアクセスとキャンパスマップ：九州工業大学戸畑キャンパス



戸畑キャンパスの所在地



交通案内



キャンパスマップ (図中の総合教育棟が会場)

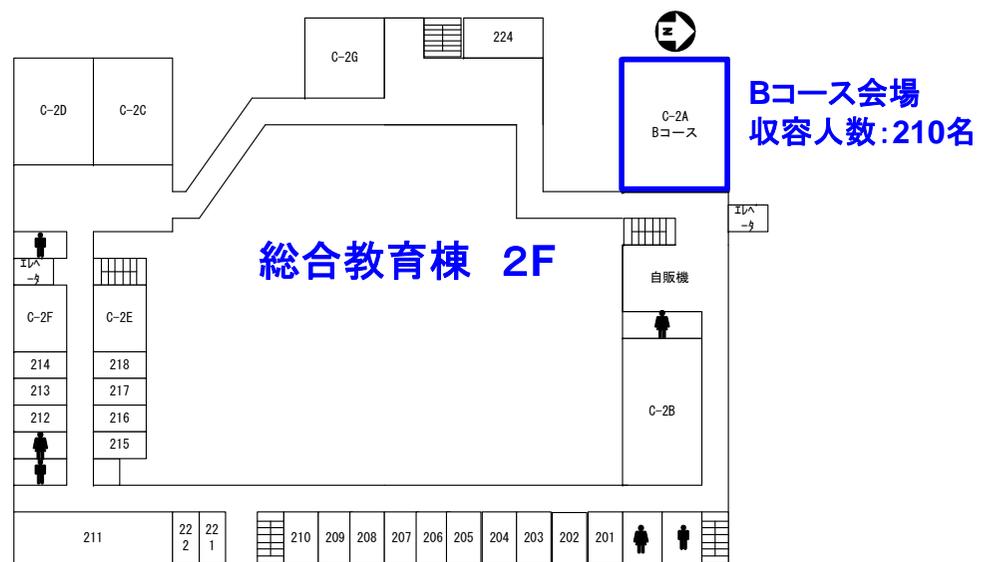
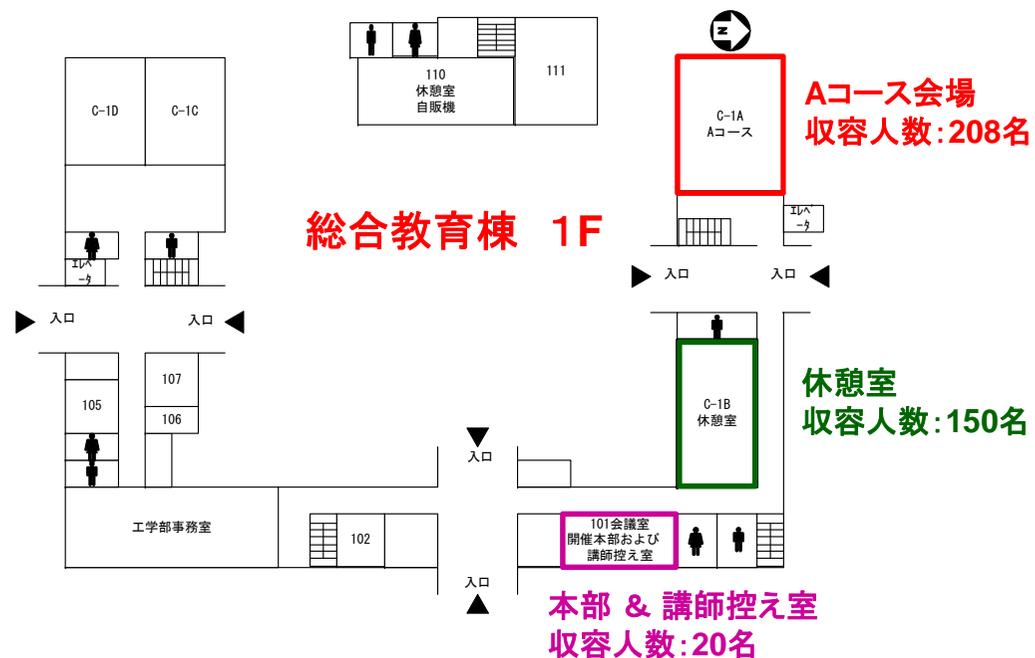
5. 会場の様子と配置図



Aコース会場(収容人数:208名)



Bコース会場(収容人数:210名)



6. 会場使用料：130,900円

不動産貸付料金表

(戸畑キャンパス)

2013/8/22～26

8:00～17:30

建物名	部屋名	最大 人数	面積	1時間当りの 施設利用料	1時間当りの 冷暖房費用 通常 7月～ 9月 12月～ 2月
			m ²		
総合教育棟	C-1A講義室	208	256	1,350	650
総合教育棟	C-1B講義室	150	189	1,000	400
総合教育棟	C-2A講義室	210	256	1,350	650
総合教育棟	共同会議室(第3会議室)	16	68	350	200
		合計	769	4,050	1,900

1時間あたりの施設利用料×使用時間	4,050	×	22.0	=	89,100
1時間あたりの冷暖房費用×使用時間	1,900	×	22.0	=	41,800
その他					0
				合計	130,900

※共同会議室の最大人数ですが、実際には20名以上収容可能とのこと

水シンポジウム開催実績

回	年	開催地						
		北海道 東北	関東 甲信越	中部	関西	中国	四国	九州 沖縄
1	1996					鳥取県		
2	1997				兵庫県			
3	1998	福島県						
4	1999		東京都					
5	2000							熊本県
6	2001			富山県				
7	2002	北海道						
8	2003						愛媛県	
9	2004					広島県		
10	2005				大阪府			
11	2006	宮城県						
12	2007			愛知県				
13	2008		千葉県					
14	2009		新潟県					
15	2010							福岡県
16	2011				京都府			
17	2012			岐阜県				
18	2013						高知県	
19	2014							長崎県
未 開 催	岩手県	茨城県	三重県	滋賀県	島根県	徳島県	佐賀県	
	山形県	栃木県	静岡県	奈良県	岡山県	香川県	長崎県	
	秋田県	群馬県	長野県	和歌山県	山口県		大分県	
	青森県	埼玉県	石川県	福井県			宮崎県	
		神奈川県					鹿児島県	
		山梨県					沖縄県	

《国際化対応委員会（仮）設立について》

1. 背景

日本の水工学は世界的にも高い水準にあり、水工学分野の研究者は、様々な国際舞台で学術的・社会的活動を展開している。しかし、個人・個別機関の活動が主体であり、国際学会や国際機関の諸活動（ex. 講演・委員会・調査研究など）への日本から人材派遣など協力を求められた場合には、個人・個別機関により対応することが多い。これは、国際学術活動の基本形でありネットワークにも優れているため、今後も発展的に継続すべき活動方式である。

一方で、国際学会や海外学会が、あるプロジェクトに対して日本から協力が求められた場合に、個人・個別機関別のコネクションに頼るルートだけでは、当該の研究者や機関へのストレスが集中し、円滑な協力や人材派遣をしにくい場合もある。例えば、国際学会の委員の後任紹介と円滑な引き継ぎ、日本での水工学に関する国際会議開催が求められた場合（ex. Two-phase flow, Ecohydraulics, etc.）の組織的対応・後援、海外での調査研究（災害調査も含む）、国際コンペ（ex. タイ洪水復興支援）、などを考える。個人・個別機関で問題なく対応できる場合には問題ないが、それが困難な場合には、水工学委員会内に国際対応窓口組織を設置して、それらを組織的に支援したり、行政・民間機関との連携を実現するための橋渡しも可能である。

2. 水工学委員会活動の総括

水工学委員会内には国際対応関連委員会として、(a) 東南アジア河川流域研究小委員会と(b) ISO/TC113 小委員会が設置されている。

(a)については、東南アジアをフィールドとする研究が今ほど **extensive** に展開されていない時代に、これを促進するために設立された委員会である。東南アジア河川流域の問題は、今後も益々発展すべき研究領域であるが、同委員会が当初目指していたミッションは一定のレベルで果たされており、むしろフィールドを東南アジアに限定することなく、さらに広汎な地域を対象に国際研究を発展させることが現在のミッションと考えられる。

(b)については、「よい技術」から「標準的な技術」への技術の価値基準が大きくシフトしている世界動向を勘案すると、標準的技術の先導に大幅な遅れをとる日本が今後も注視し、水工学分野の標準技術の輸出に力を入れるべき時代において、益々重要な役割を果たしている。当委員会は、他の調査研究系小委員会と性質が異なり、H23年度の第一回水工学委員会でも確認されたように、水工技術の国際基準化に遅れをとらないような体制を維持しながら、常時、情報収集を継続する土木学会のISO対応の一翼を担う国際対応委員会であり、継続の必要性がある。

水工学委員会外の国際対応組織としては、IHAR Japan Chapter が設立された。水工学全分野をカバーしているわけではないが、水工学委員会メンバーとの重複も多く、水工学

委員会の国際対応組織を設立した場合には、同 Chapter との太いパイプが必要である。

3. 活動原則

- ・個人・個別機関の国際活動に対して干渉するものではなく、むしろ要請・問い合わせなどがあれば、必要に応じて個別活動を支援・後援する。
- ・国際活動をする場合に、ここを通さなければならないという性質のものではない。
- ・学術活動に限定（例えば、ビジネス、国際行政には関与しない）。
- ・海外の突発災害調査は所掌外（災害対策小委員会が担当）

4. 想定し得るミッション

- ・日本の水工技術の国際基準化への働きかけ、世界の技術動向の監視・情報収集（ex. ISO/TC113）
- ・国際技術コンペへの協力（？ビジネス？）
- ・国際学協会のカンファレンス開催依頼などへの組織的対応（例えば、Local Committee 組織化への協力・支援）
- ・IAHR Japan Chapter との相互連携（情報の共有化）
- ・個人あるいは個別機関から国際学術活動への協力依頼があった場合の対応
- ・海外のフィールド研究、海外との共同研究に関する情報収集（東南アジア河川流域研究小委員会の発展的改組）
- ・国際組織（学会、機関）、海外組織から協力要請があった場合の組織的支援、窓口

XML化の説明

大石 哲

2013/07/04

J-STAGE 3「全文 XML 推奨」

- 従来のPDF等による組版をやめ、XMLデータ化

The screenshot displays a scientific article interface with the following components:

- Export Options:** Buttons for "Export citation", "PDF (1448 K)", and "More options...".
- Table of Contents:** A sidebar menu with "Show thumbnails in outline" checked. It lists sections: Abstract, Highlights, Keywords, 1. Introduction, 2. Experiment (with sub-section 2.1. Experiment facilities), 2.2. Experimental runs (with sub-section Table 1), and 3. Results (with sub-section 3.1. Hydraulic characteristics of flow in channel bends).
- Main Content:**
 - 3. Results**
 - 3.1. Hydraulic characteristics of flow in channel bends**
 - Text:** "Flow fields in channel bends were measured immediately after the start of the experiment when the bed is basically still flat without significant deformations, see Fig. 2. Typical features of flow in channel bends can be found from surface velocity measurement results, including both cross-sectional and streamwise variation of flow magnitude. In our experiments, the depth-width ratio is around 1/10–1/20, which implies that the water depth is very small compared with the width of the channel. Velocity distribution measurements show a high velocity near convex bank at a streamwise position a little bit upstream of the apex. The maximum flow velocity shifts to the opposite bank after passing by the apex, leaving a low velocity area near the convex bank just downstream the apex, see Fig. 2. This is a typical feature of the flow in such shallow water channel bends (Abad and Garcia, 2009a; Blanckaert, 2011; Whiting and Dietrich, 1993a and Whiting and Dietrich, 1993b). Such features are usually called cross sectional velocity redistribution, which have widely been demonstrated and considered important to the formation and maintenance of river meanders in fluvial environments by forming a point bar in the low velocity area and a pool on the opposite side (Braudrick et al., 2009; Federici and Seminara, 2003). Experimental observations show that the increasing in sinuousness of channel tends to increase the cross-sectional variation of flow velocity at the apex of bends, see Fig. 2(a) and Fig. 2(b)." (Note: The original text contains some typos like "sinuousness" and "increasing in", which have been corrected for accuracy.)
 - Figure 2:** A velocity distribution plot showing a curved channel cross-section with velocity vectors. The vectors are numbered 9 through 21 across the width of the channel. A scale bar indicates 0.2 m/s.

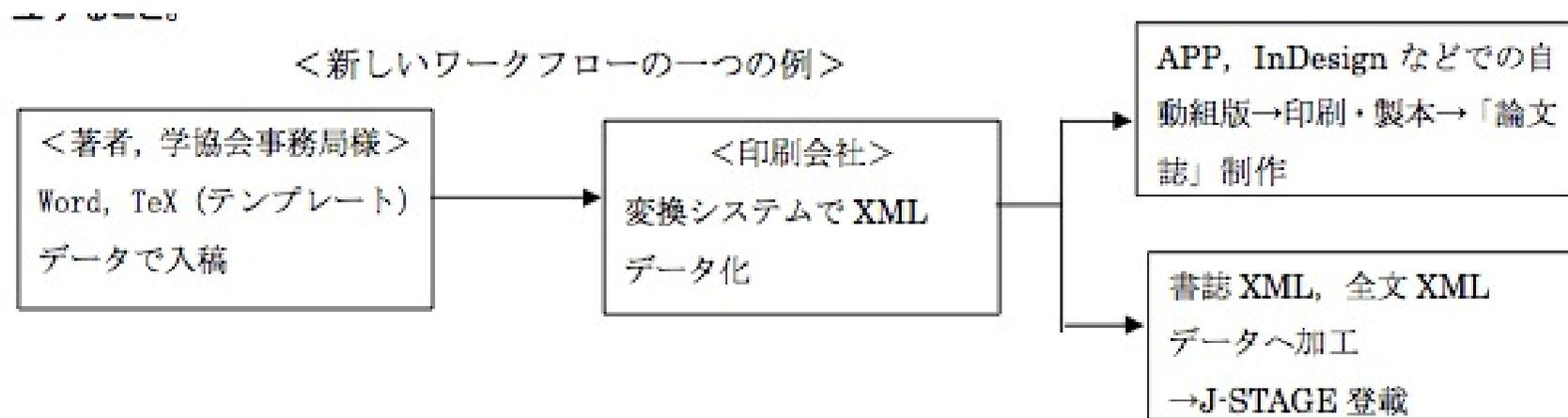
- Right Sidebar:**
- Bibliographic information:** Search ScienceDirect, Search.
- Citing and related articles:** This article belongs to a special issue: **Special Issue of on Hydroinformatics 2010: Advances of hydroinformatic techniques in hydro-environmental research**, Edited By Qiuwen Chen and Jianhua Tao.
- Other articles from this special issue:** **Advances of hydroinformatic techniques in hydr...** by Qiuwen Chen, Jianhua Tao; **Spring micro-distribution of macroinvertebrate in...** by Qiuwen Chen, Qingrui Yang, Ruonan Li, Jinfeng Ma; **A possible mechanism of destruction of coastal...** by Zhenhua Huang, Tso-Ren Wu, Tzu-Yu Chen, Shawn Y. Sim.
- View more articles »**
- Related articles:** **NUMERICAL MODELING OF SUSPENDED SED...** 2006, Journal of Hydrodynamics, Ser. B.
- Bed morphology and sedimentology at the confl...**

メリット・デメリット

- 引用情報などが自動で集計, リンクされる
- 不正投稿などを検知できる
- 論文内の検索が容易

- 手間がかかる
- 作業の変更を強いられる
- 金がかかる

ワークフローの例



現状の想定

- 最も手間がかからない方法
 - すべてテンプレート化されたWORDファイルで編集
 - PDFで査読
 - 登載決定後, PDFとともにWORDファイルを印刷会社へ
 - 印刷会社でPDFをCDROM化
 - 講演会后, 印刷会社経由などでXML化・JSTAGEへ

費用 6ページ

和文	英文
10,000円程度	6,000円程度

平成 25 年 6 月 7 日

調査研究委員会 委員長 各位

土木学会将来ビジョン策定特別委員会(仮称)
委員長 磯部 雅彦

調査研究委員会における将来ビジョン等に関するとりまとめ結果について (照会)

拝 啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、土木学会将来ビジョン策定特別委員会(仮称、以下「当委員会」という。)は、土木学会100周年記念事業である「将来ビジョン」を策定するため、平成25年3月15日の理事会承認を得て設置されました(別紙1参照)。

当委員会においては、平成25年4月15日に第1回委員会を開催して以降、精力的に議論を重ねてきており、現在、添付資料1に示す「将来ビジョン骨子(案)」(案の段階であり、確定ではありません)の内容で「将来ビジョン」をとりまとめる予定としております。

「将来ビジョン」の基礎資料とするため、当委員会では、添付資料2の内容で既存資料を整理することとしておりますが、貴委員会にて下記に示す既存の検討結果等がございましたらご提供いただけると幸いです。

本照会の趣旨をご理解いただき、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

敬具

記

1. 対象となる資料(報告書等)

- ・調査研究分野に関する将来ビジョン(現状課題、将来目標、戦略等)又はこれに類する資料
- ・土木技術者の今後のあり方、役割等についてとりまとめた資料

2. 資料提出先

土木学会事務局 会員・企画課長 竹田 廣
E-mail: takeda@jsce.or.jp TEL 03-3355-3443

3. 資料提出時期

平成 25 年 6 月 28 日を目途としますが、7月以降となる場合は土木学会事務局までご連絡いただけると幸いです。

4. 問い合わせ先

土木学会将来ビジョン特別委員会(仮称) 委員兼副幹事長
株式会社日本能率協会総合研究所 高野 昇
E-mail: noboru_takano@jmar.co.jp TEL:03-3578-7515 (直通)

以上

《協議事項》水工学論文集編集作業について (会議予定)

開催日	会議	会場
2013年7月4日(木)	第一回幹事会	土木学会A会議室
2013年7月25日(木)	第一回委員会	土木学会講堂
2013年10月3日(木)	第一回 編集小委員会幹事会	土木学会講堂
2013年10月4日(金)	第二回幹事会・ 第一回編集小委員会	土木学会講堂
2013年11月7日(木)	第三回幹事会・ 第二回編集小委員会	土木学会講堂
2013年12月13日(金)	第二回 編集小委員会幹事会	土木学会CD会議室
2014年3月4日(火)	第二回委員会	神戸大学

《協議事項》水工学論文集編集作業について (編集委員会委員)

【方針確認】

- ・編集委員は、基本的に水工学委員会委員全員とし、それに加えて**数名**の方を部会長の推薦で加える。
- ・担当分野は、水文・流砂・河川水理・数値解析・河川環境・湖沼とダム・沿岸
- ・20-30名程度(関東圏の委員を中心)には、編集幹事をお願いする。

平成 25 年度
水工学論文集編集委員

【執行部】	3		
委員長	◎○道奥	康治	(神戸大)
幹事長	◎○立川	康人	(京大)
編集幹事長	◎○知花	武佳	(東大)
【水文】	17		
委員兼幹事	大石	哲	(神戸大)
委員兼幹事	○浅沼	順	(筑波大)
委員兼幹事	○石平	博	(山梨大)
委員兼幹事	○神田	学	(東京工大)
委員兼幹事	※木内	豪	(東京工大)
委員兼幹事	原田	守博	(名城大)
委員	沖	大幹	(東大)
委員	中北	英一	(京大防災研)
委員	○中津川	誠	(室蘭工大)
委員	○風間	聡	(東北大)
委員	○近森	秀高	(岡山大)
委員	堀	智晴	(京大防災研)
委員	八田	茂美	(苫小牧工専)
委員	川越	清樹	(福島大)
委員(副査のみ)	鈴木	正人	(岐阜工専)
委員	※江種	伸之	(和歌山大)
委員	※市川	温	(山梨大)
【河川水理】	15		
委員兼幹事	富永	晃宏	(名工大)
委員兼幹事	○二瓶	泰雄	(東京理科大)
委員兼幹事	藤田	一郎	(神戸大)
委員兼幹事	※川池	健司	(京大防災研)
委員	※矢野	真一郎	(九州大)
委員	※門田	章宏	(愛媛大)
委員	河原	能久	(広島大)
委員	※木村	一郎	(北大)
委員	鬼束	幸樹	(九州工大)
委員	渡辺	勝利	(徳山高専)
委員	○武藤	裕則	(徳島大)
委員	○杉原	裕司	(九州大)
委員(副査のみ)	藤堂	正樹	(パシフィックコンサルタント)
委員(副査のみ)	中嶋	規行	(日本工営)
【流砂】	7		
委員兼幹事	○関根	正人	(早稲田大)
委員兼幹事	※竹林	洋史	(京大防災研)
委員	泉	典洋	(北大)
委員	渡邊	康玄	(北見工大)
委員	里深	好文	(立命館大)
委員	神田	佳一	(明石工専)
委員	※堤	大三	(京大防災研)
【河川環境】	8		
委員兼幹事	○篠田	成郎	(岐阜大)
委員兼幹事	○田中	規夫	(埼玉大)
委員兼幹事	安田	陽一	(日本大学)
委員	○戸田	祐嗣	(名古屋大)
委員	○清水	義彦	(群馬大)
委員	※田代	喬	(名古屋大)
委員(副査のみ)	萱場	裕一	(土木研究所)
委員(副査のみ)	○今村	正裕	(電中研主任研究員)
【湖沼・ダム】	5		
委員兼幹事	○横山	勝英	(首都大学東京)
委員	○角	哲也	(京大防災研)
委員	※矢島	啓	(鳥取大)
委員(副査のみ)	大槻	英樹	(ニュージェック)
委員	※梅田	信	(東北大)
【沿岸】	7		
委員兼幹事	田中	昌宏	(鹿島建設)
副査のみ	田中	仁	(東北大)
委員	朝位	孝二	(山口大)
委員	西田	修三	(大阪大)
委員	※米山	望	(京大防災研)
委員(副査のみ)	△八木	宏	((独)水産総合研究センター)
委員(副査のみ)	※井上	徹教	(港湾空港技研)
◎執行部		執行部:3名	
○幹事		幹事:17名	
△海岸工学連絡委員		委員:59名	
※水工学委員以外		行政, 民間, 事情のある教員は副査のみ	

《協議事項》各賞の英語名称について

・水工学論文賞：

Best Paper Award

・水工学論文奨励賞：

Young Researcher's Encouragement Award

・国際セッション優秀賞：

(過去の賞状の名称)

Best Paper Award in International Session

(代案)

Excellent Paper Award in International Session

《協議事項》水工学論文集編集作業について (収支と予算)

第57回水工学講演会 収支

第58回水工学講演会 予算案

収入	著者負担金送料込み@23,900×303編	¥7,241,700	収入	著者負担金送料込み@23,900×280件	¥6,692,000
	論文集販売@5,000×127冊(事前+当日)	¥635,000		論文集販売@5,000×100冊(事前+当日)	¥500,000
	論文集送料	¥72,900		論文集送料@900×75部	¥67,500
	参加費@3,000×205人	¥615,000		参加費@3000×220人	¥660,000
	広告	¥0		広告(提案)	¥51,450
	製品展示	¥0		製品展示(前年度踏襲)	¥0
収入合計	¥8,564,600	収入合計	¥7,970,950		
支出	1. 会場関係費(会場使用料)	¥0	支出	1. 会場関係費(会場使用料)	¥500,000
	2. 会場関係費(PCプロジェクター等の備品)	¥0		2. 会場関係費(PCプロジェクター等の備品)	¥0
	3. 特別講演講師への謝金, 旅費	¥57,730		3. 特別講演講師への謝金, 旅費	¥60,000
	4. 編集委員会費(旅費, お弁当)	¥1,131,665		4. 編集委員会費(旅費, お弁当)	¥1,431,273
	5. 論文投稿, 査読システム運用費 5は印刷 ポスター・プログラム印刷を含む	¥1,813,140		5. 論文投稿, 査読システム運用費 5は印刷 ポスター・プログラム印刷を含む	¥2,000,000
	7. 論文集事前発送宅急便代	¥242,532		7. 論文集事前発送宅急便代	¥250,000
	8. 宣伝費 a(ポスターデザイン料)	¥30,000		8. 宣伝費 a(ポスターデザイン料)	¥30,000
	9. " b(DM発送費等)	¥111,490		9. " b(DM発送費等)	¥110,000
	10. 事務局関係(職員出張費等)	¥53,180		10. 事務局関係(職員出張費等)	¥100,000
	11. 学生アルバイト	¥496,000		11. 学生アルバイト	¥500,000
	12. 通信経費・連絡費	¥19,970		12. 通信経費・連絡費	¥20,000
	13. その他 a(J-Stageアップロード(土論指定業者))	¥159,075		13. その他 a(J-Stageアップロード(土論指定業者))	¥200,000
	14. " b(期間中の委員会, 部会お弁当代)	¥247,747		14. " b(期間中の委員会, 部会お弁当代)	¥300,000
	15. " c(事務用品・資料印刷)	¥33,875		15. " c(事務用品)	¥50,000
	16. " d(会場案内看板)	¥0		16. " d(会場案内看板)	¥0
	17. 定期購読買上(出版部門)	¥-31,608		17. 定期購読買上(出版部門)	¥-31,608
	18. 参加券作成	¥55,965		18. 参加券作成	¥60,000
	19. 管理費(25%)	¥2,141,150		19. 管理費(30%)	¥2,391,285
	支出合計	¥6,561,911		支出合計	¥7,970,950
収支差額	¥2,002,689	収支差額	¥0		

著者負担金(税込み+論文集CD+参加費+送料900円を含む): ¥23,900
 論文集CD: ¥5,000
 参加費: ¥3,000

広告収入: 裏表紙一面で¥73,500(税込み)から手数料(3割)を引いたもの。

《協議事項》水工学論文集編集作業について (キーノートレクチャー)

	講師	題目	分野
50回	山田 正	New Trend and Application of Runoff Analysis	水文
	辻本哲郎	Hydraulics–Ecology Cooperative Research on River Ecosystem	河川環境
	石川忠晴	Plannning and Management of Field Experiments in Environmental Hydraulics	環境
	立川康人	Flood Predictions in Japan and PUB, Predictions in Ungauged Basins	水文
51回	砂田憲吾	Water Related Issues in the Asian River Basins	水文
	道奥康治	Nutrient–Sediment Loads from Forest Catchments and Their Influence on Lake and Reservoir Eutrophication	湖沼・ダム
	清水康行	Numerical Modelling of Microscale and Mesoscale Bedforms under Unsteady Discharge	流砂
	田中 仁	Hydro– and Morpho– Dynamics at River entrances	河口水理
52回	椎葉充晴	Kinematic Wave Flow Models for River Basin Runoff Simulation	水文
	藤田裕一郎	A View on River Channel Process and Sediment Transport as One of Conventional Yet Current Subjects in Hydraulc Engineering	流砂
	戸田圭一	Urban Flood Analysis Considering Underground Space	氾濫水理
	藤田正治	Several Important Issues from Field and Model Investigations on Landslides	土砂生産

53回	長谷川和義	Channel Morphology of Mountain Streams and Inhabitation of Masu Salmon	流砂
	天野邦彦	Practical Environmental Simulation Models for Lakes and Reservoirs, Their Development and Needs	湖沼・ダム
54回	小尻利治	PROGRESSIVE WATER RESOURCES MANAGEMENT BASED ON SYSTEMATIC APPROACHES	水文
	清水義彦	FORESTATION IN GRAVEL-BED RIVERS AND AN ATTEMPT OF ITS CONTROLLING	河川環境
55回	中川 一	Erosion of Unsaturated River Embankment Due to Overtopping Water	河川防災
	関根正人	Recent Progress of Sediment Transport Research And Prediction of Bed Deformation	流砂
56回	小松利光	“DISASTER IMMUNITY” – A NEW CONCEPT FOR ADAPTATION TO DISASTER HAZARD INTENSIFICATION	防災
	田中規夫	EFFECTIVENESS AND LIMITATIONS OF COASTAL FOREST IN LARGE TSUNAMI: CONDITIONS OF JAPANESE PINE TREES ON COASTAL SAND DUNES IN TSUNAMI CAUSED BY GREAT EAST JAPAN EARTHQUAKE	防災
57回	福岡捷二	TOWARD INTEGRATED MULTI-SCALE SIMULATIONS OF FLOW AND SEDIMENT TRANSPORT IN RIVERS	流砂
58回	寶馨		
	篠田成郎		

《協議事項》水工学論文集編集作業について (編集方針)

- ・システム, XML関連は引き続き大石先生にサポートを依頼.
- ・主査・副査の不足→「副査のみ」の依頼も含め, 査読員を増員.
- ・減点方式ではなく, 加点方式で評価. 特に, 新たな視点を提供しているものや, 新しい取り組みをすくいあげていく方針へ. 一方で, レビュー不足(自分の既往研究紹介のみ), 実験しただけ計算しただけで考察・検証不十分のものに対する適切な指導を徹底!
- ・日本人が英語論文を書いたときの査読結果には英語でコメントが原則. 第三査読者が日本語で書いてきた場合?
- ・未だに減らない査読結果へのクレーム対策. 返却文の書き方, あり方. 第三査読者意見に対する主査副査によるチェックを徹底!
- ・返却理由書では説明不十分であり, 返却でも修正意見をつけるべきとの意見もある→原則つけない. 著者から修正意見公表の問い合わせがあったときのみ主査が, 内容を再考, 修正し, 公開する.

水工学論文賞選考委員会報告

平成25年度水工学論文賞，同奨励賞候補論文について

水工学論文賞および水工学論文奨励賞内規 (2005.8.15改訂版)主要部抜粋

2.対象論文と授与件数

水工学論文賞：**原則として1論文**に授与。

水工学論文奨励賞：水工学講演会開催年の3月31日に32歳以下。

水工学論文集掲載論文の主たる著者であり

水工学講演会における発表者個人。

過去に同賞の受賞経験の無いこと。

原則として2-3名に授与される。

5.審査方法

(4) **査読報告**をもとに水工学論文賞選考小委員会にて水工学論文賞候補推薦論文および水工学論文奨励賞候補推薦者の決定を行う(第1段審査)。

(7) **第1回水工学論文賞選考小委員会(2013/7/4)**にて水工学論文賞候補論文および水工学論文奨励賞候補者を決定する(第2段審査)。

(8) **第1回水工学委員会(本日)**において水工学論文賞受賞論文ならびに水工学論文奨励賞受賞者を審査決定する(第3段審査)。

水工学論文奨励賞受賞人数

第36卷	3	第47卷	3
第37卷	3	第48卷	4
第38卷	4	第49卷	3
第39卷	3	第50卷	3
第40卷	3	第51卷	3
第41卷	3	第52卷	3
第42卷	3	第53卷	3
第43卷	3	第54卷	3
第44卷	3	第55卷	3
第45卷	3	第56卷	4
第46卷	3	第57卷	?

* 3-4名が通例

土木学会論文集に掲載された論文の水工学講演会での発表について

○提案

水工学講演会開催前年の土木学会論文集 No. 1 から 3 (水工学講演会開催前年の 1 月から 12 月の掲載分) に掲載された論文についても、水工学講演会で発表する権利を与える。

○利点

- 1) 土木学会論文集の投稿増が期待される。
- 2) 水工学講演会論文集 (土木学会論文集 No.4) の投稿減による査読の適正化が期待される。
- 3) 水工学講演会を日本最高の水工学の議論の場とできる。
- 4) 運用上の困難がない。
- 5) 海岸工学講演会ではすでにこうした扱いで実施されていて、特に問題は出ていない。
- 6) 発表論文から発表料を徴収することで、収入増につながる。

○欠点

特になし。

2013. 7. 25

国総研 河川研究部

河川砂防技術基準をベースとした河川技術の検討に関する学会との連携

1. 背景

○国土交通省水管理・国土保全局では、平成 24 年 6 月に河川砂防技術基準検討委員会の審議を経て、河川砂防技術基準調査編を改定しました。

○執筆を担当している国総研河川研究部では、自ら研究開発をすすめることはもとより、最新の知見を技術基準に反映させるため国内・国外の関連する知見のレビューを行っています。また、学会との河川技術の検討を通じて、技術基準を発展させていくことが重要であると認識しています。

2. 提案

○学界や民間の新たな知見・技術と技術基準との橋渡しを行うとともに、現場の実態・ニーズにあった技術開発を一層促進させる場として、技術開発研究をまさに担っている学会メンバーと意見交換が行える WG を設けることが有効と考えています。

○意見交換のテーマとしては、「河川砂防技術基準 調査編（平成 24 年 6 月改訂版）」を考えています。

○関係する学会（土木学会、応用生態工学会など）と連携して、技術基準の各章に対応した以下の WG を設定することを想定しています。なお、当面河川 WG の活動を開始したいと考えています。

（水文 WG）

第 2 章 水文・水理観測 [第 3 章 水文解析]

（河川 WG）

第 4 章 河道特性調査

第 5 章 河川における洪水流の水理解析

第 6 章 河床変動、河床材料変化及び土砂流送の解析

（水害 WG）

第 7 章 浸水解析 [第 9 章 水害リスク評価]

（環境 WG）

第 11 章 河川環境調査

○当方は、各 WG について関係研究室長（環境については水環境研究官）および主任研究官の参加を考えています。

○学会活動にあわせて少なくとも年 2 回程度の意見交換を想定しています。

3. 相談

○本取り組みについては、国総研が学会に依頼するものではなく、今後の河川技術の発展という観点から、双方対等の関係を前提にすることが必要であると考えています。

○土木学会水工学委員会の意思として、国総研とのカウンターパートとして河川 WG を設置していただけないでしょうか。